544
12

投

544
12

# 初齋遺稿

大正十四年八月一日

# 初齋遺稿

帝國圖書館藏

海南よしる氏寄贈本

大正
14 8. 1
寄贈

# 故人肖像

上圖　大正三年二月十一日京城居留民團會計役タリシ當時
長橋町ノ寓居玄關ニテ撮影

下圖　大正十二年六月二十五日悠々晩年ヲ過セル府下長崎
村ノ寓居ニテ撮影

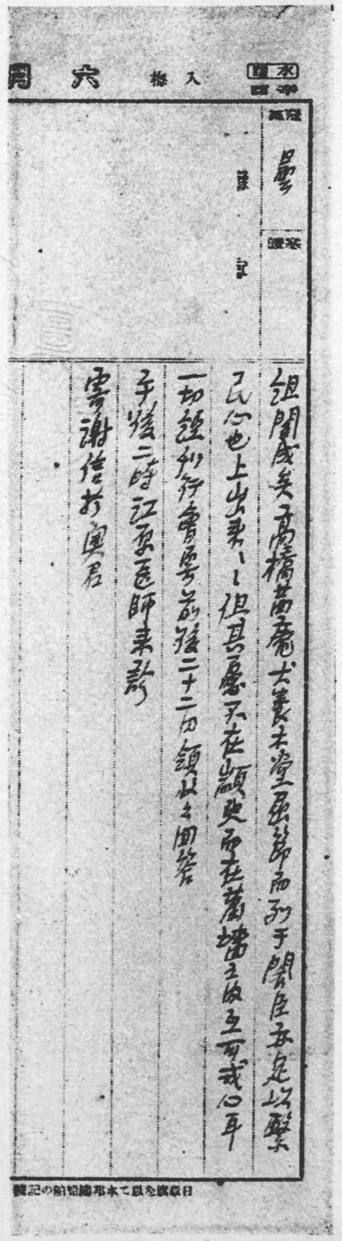
（佐藤信吉謹寫）

# 故人眞筆

乙未集 明治二十八年

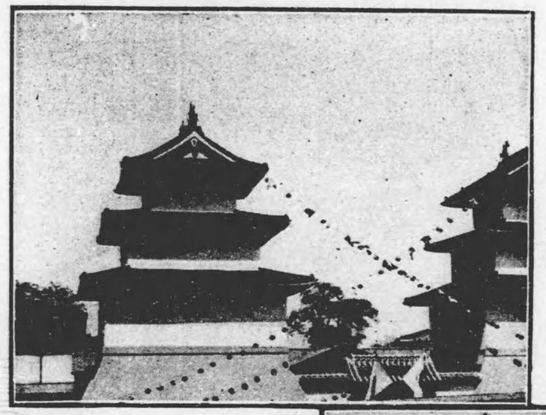
一月三十日 踰西車嶺 嶺在黃海道瑞興 有劍水驛之間

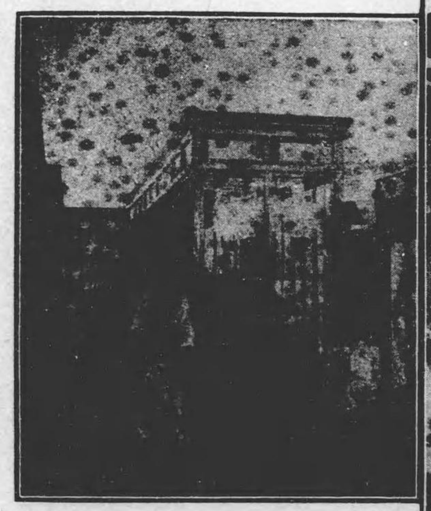
世亂書生思立功、仗刀萬里此從戎、龍泉館外行雲合、劍水亭邊歸鳥空、敢不微臣誰盡力、豈令聖帝獨蒼蒼、西車嶺上一回首、汗馬高嘶氣勢雄、

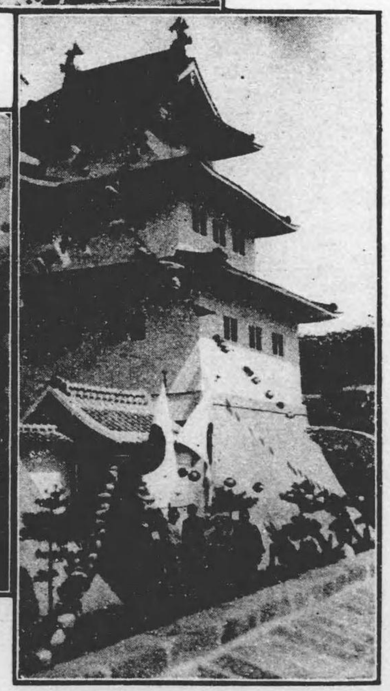


右圖 詩稿ノ一部ハ日清戰役當時(故人二十七歳)ノ作ニ累ル
左圖 大正十三年六月十一日ノ日記故人ノ絶筆ナリ

## 京城ノ名古屋城







上圖中左端ノ日本家屋ハ住宅●國旗ヲ掲ゲタル正門ノ奥ニ見エテ白衣ヲ纏ヒ●ス示ヲ部一ノ内部ノ其ハ左圖下●店賣ハルタ立テルハ鮮人店員ナリ。下圖右前列ニ並ビ立テルハ故人夫妻●城ノ後方ニ見ユルハ屢々詩稿中ニ現ハルヽトコロノ南山ナリ。

尾崎行雄氏の題辭

544-12

# 小傳

海浦篤彌氏初齊と號す、明治二年一月陸奥深浦に生る、尊海氏の四男なり、明治十四年弘前に出て、東奥義塾に學び、二十年業終はるや、同窓數名と共に上京し、英吉利法律學校に入る、時に伊藤博文公は總理大臣、井上馨侯は外務大臣として歐化主義を唱へ、鹿鳴館舞踏の醜聲中外に漏る、加ふるに伊藤内閣は條約改正をなさんとし物情騷然たり、海浦氏亦た身の學校に在るを忘れ、同志と共に慨然反對運動に着手し、伊藤總理、井上外務に向つて辭職勸告をなす、政府が彼の有名なる保安條例を發布して、星亨、尾崎行雄、片岡健吉等の名士に退去を命じたるは、實に此の年の十二月廿五日なりき。

明治二十二年帝國憲法は發布され、帝國議會は翌廿三年召集さるゝに決し、國内は衆議院議員選擧の準備に忙殺されたり、此秋に際し海浦氏は二十三年を以て單身朝鮮に航行す、蓋し東洋の禍根は朝鮮にして、日清の關係は朝鮮により破裂するの危機なるに鑑み、親しく朝鮮の實狀を視察する爲めにして、尾崎行雄氏の勸告に基くといふ二十六年歸京するや、夫人よし子及び櫻庭經緯、島川敬造と同伴し京城に赴き居を南

山の麓にトす。

南山の寓居は朝鮮人より借りたる家屋にして、草蓬々たる陋居なり、雨の降る時の如き、傘を天井に吊して僅に之を防ぐ程なりしも、朝鮮に先鞭を着けたる氏の信望大にして内地より京城に來るもの、概ね氏を訪はざるはなく、殊に日清戰爭起つてより、政客、軍人、從軍記者等南山の寓居に來往し、酒を飲みては時事を慨し、醉ふては陶然として溫突の上に眠るは其の日常にして、氏は之に對し欣然たるのみにて唯だその為すが儘に委せたり、南山の寓居が京城の梁山泊として記者仲間に喧傳されたるは之が爲めなり。

偶々東學黨蜂起し、朝鮮政府之を鎭定する能はずして援を清國政府に請ひ、清兵將に到らんとして日清衝突の機愈々迫まる、海浦氏この危機に接し、南山に晏如たる能はず、東學黨の實勢を偵察せんとし、危險を冒して其根據地に潛行し、遂に黨首に會談したるは氏の日記に載する所の如し、此行や決して氏の單なる冒險にあらずして我國に有益の資料を與へたるは言ふ迄もなし。

日本軍が連戰連捷し、清國兵を鴨綠江岸に壓迫するや、民政署は安東縣に設置され小村壽太郎侯民政長官となる、氏その下に事務を執こと一年、更にその推薦にて外務省に入りしも、夢寐の間に忘るゝ能はざる朝鮮の天地は、永く氏を東京の人たらしめず、またも京城に歸りて、明治三十一年商品陳列所を開き日本の雜貨を販賣す。

從來時事を慨し、國事に奔走したる海浦氏が俄かに商店を開きたるは、生活上の方向轉換に相違なからんも、日本商人は動もすれば不正の商品を高く朝鮮人に賣附け、暴利を貪らんとするの情弊あるに察し、之を打破し日本品の聲價を維持せんとしたるものにして、其販賣する雜貨は正確にして薄利なりし爲め、朝鮮顧客の信用は逐年高まり、時として店頭は鮮人にて山を築くの盛況を呈す、時の公使林權助、領事秋月左都夫の兩氏は此の盛況に感じ、政府に具申したる結果、農商務省より補助を受くることゝなり、氏の陳列所はその規模を擴張し、三十六年京城旭町にいよ〳〵商品陳列所として晴れの看板に掲ぐると共に、大阪博覽會に名古屋の商工業者が國の傲りとしてその出陳所を飾りたる、名古屋城の模型を買入れ、陳列所の一部となしたり、その粲然として半空に聳へる金の鯱は、陳列所の名を益々高らしめて、顧客は增加する一方なりき。

然かも三十七八年の戰役によつて、朝鮮は確實に日本の手に歸し、日韓併合將さに成らんとし、日本商人にして陳列所と競爭せんとするもの續出するや、氏は右陳列所の建物を日本メソジスト教會に讓渡し、明治四十二年商店を閉鎖す。

間もなく居留民より推されて民團の財政を掌り、五年にて辭退し、爾來詩酒に悠々

せり、氏が明治二十三年より渡鮮して心血を灑ぎたるは、豐公の征韓以來日本と特殊の關係ある朝鮮を、日本の勢力下に置かんとする爲めにして、日清戰爭により清國の勢力を朝鮮より驅逐し、三十七八年戰役により露國の朝鮮に對する野望を放擲せしめて、朝鮮が全く日本の領土となりたるは、一生を朝鮮に捧げたる氏の欣快措く能はざる所にして、日本商品の聲價を維持し、日本商人の信用を高むる爲めに開始したる商品陳列所も、後の商人續々として其後に追ふに至りたるは、氏の深く滿足する所なるべし。

朝鮮にて我事成れる海浦氏は、晩年を鄕里に送らんとし、大正十一年夫人を携へて深浦に歸りたるも、國を出でゝ三十年交友の甚だ少なきと、寒氣の或は健康を損するを虞れ、大正十二年上京し府下長崎村に寓居す、氏の東京に出でたるは舊友と相會し詩酒に餘生を樂まん爲めなるべきも、不幸にして十三年初夏動脈硬化性腎炎に襲はれ病む事二月餘、八月一日未明遂に逝去せり。享年五十六。豫覺か、偶然か、是の年正月の日記中「死後要項」なるもの錄されたるを見る。用意周到なる氏の一面を窺ふに足るべし、しかして院號を「朝鮮院」となしたるが如きは以つて朝鮮と生命を共にしたる氏の面目を躍如たらしむるものと云ふ可し。

大正十四年六月　　遺友　三浦勝太郎識

## 死後要項

一、わざ〳〵僧侶を聘して讀經を乞ふに及ばず。但し余は世の所謂無宗教論者にあらず。

一、若し醫學界にて研究の爲め死體の解剖を希望する者あらば解剖に附するも異存なし。否な寧ろ本望なり。

余の肉體は尋常一樣ならざるを以て、或は異數の參考資料を得らるゝやも圖り難し。

例へば余の酒と煙草に於ける實に人並以上なりしを以つて衞生保健上好個の實證を得らるべきを信ず。

一、法名(戒名)を要すとせば「朝鮮院初齋篤彌居士」と命名しては如何。又單に「初齋海浦篤彌居士」とするも可なり。

一、白骨は高野山金剛峰寺納骨堂に委託するは最も簡捷なるべし。但し親族の希望あらば故鄕の墓地に埋るも異存なし。

墓標や碑石を樹るに及ばず。常盤木一株を植て置かば充分なり。

## 編纂餘記

一、海浦氏は明治十八年時事を慨し、屢次尾崎行雄氏を訪問して政治上の意見を交換し、又二十三年の渡鮮には尾崎行雄氏極力盡力されたり。斯る關係なるが故に、今回の遺稿出版に際し、尾崎氏は題字として朝鮮に關する其作歌を寄せられたり。而して朝鮮併合は我國民の宿望にして、併合に際し尾崎氏の懷かれたる感想は、朝鮮を生命としたる海浦氏の同じく懷きたる感想ならん。

一、海浦氏の遺稿中友人との往復文書、又は雜錄の如き少なからず。然かも雜錄は朝鮮を主としたるものを載せ、他は之を略すこととせり。

一、海浦氏の日記は大正十三年六月十一日、即ち加藤內閣の成立に關する短評を以て擱筆し居れり。短評は別項寫眞の如し。明治十八年學生として政治に運動したる氏は、病魔に襲はれつゝ猶ほ新內閣の運命を卜す、氏の念頭に始終往來するは國家國民の休戚なり。（三浦勝太郎記）



## 初齋遺稿目次


初齋詩稿　一
在鮮詩稿　三
歸臥詩稿　五三
卜居餘滴　六二
野隱詩稿　七三
南征日記　七五
東學黨視察日記　七七
南征餘錄　一〇〇
回顧漫錄　一〇五

附錄
尾崎行雄氏題字　卷頭
故人小傳　卷頭　一
附死後要項　仝　廿五
故人と花　六一
マンムル、フエサ小史　一二九


目次終

# 初齋詩稿

# 在鮮詩稿

## 辛卯集

明治二十四年

寄懷三首

予之始來于朝鮮漢城、實係明治二十三年冬臘末日、越二十四年春、偶倣顰而構左三首、抑亦予作詩之始也。

忡々夙抱國家憂　孤劍飄然賦遠遊
黑夜星飛千里夢　隱鐘霜落五更愁
蛩窓雪案學猶淺　鳥哺犬防恩未酬
何處此生埋骨地　天空海濶望悠々。
也作他鄉萬里人　誰言萍草是前身

雲烟易鎖關山月　氷雪偏驚邊塞春
投筆班生存氣節　棄繻終子見精神
粗豪愧不治家產　菽水無曾慰老親。
浮生無所極　流落在天涯　虎嘯南山峙
馬嘶東海遐　一身許君國　雨鬢曝風沙
欲逐空中鶴　却憐井底蛙　盤根分利鈍
錯節辯正邪　斷續哀鴻遠　去來噪鵲斜
惟吟他境月　空負故園花　漫作四方士
乾坤不耐嗟。

# 壬辰集

明治二十五年

## 漫言二首　元日作

今是未知昨日非　看來世事足歔欷
窮通漫說夢中夢　活殺都忘機外機
送舊迓新人自老　靡風浴雨草空肥
聖朝誰濺賈生淚　愁然長安一布衣。

流俗滔々日益非　却憐兒女喜新衣
月寒半夜冲軍氣　星落空林伏禍機
馬背長鞭頻駄夢　篋中古劒更添威
雄圖百載英雄恨　嘆息年々髀肉肥。

## 寄璞園翁　一月十五日

翁姓鄭名顯奭、年七十五、住于南松峴、善詩文、又巧書畫、

千秋遺恨哭英雄　落拓半生奈轉蓬
試閱地圖長一嘯　大鵬西月去如弓。

大鵬西去月如弓　海陸相連布帆通
孤負丈夫四方志　煙波萬里駕長風。

烟波萬里駕長風　一路平安京洛中
喜見江山迎我笑　六花滿地夕陽紅。

六苔滿地夕陽紅　湖海風塵一世空
不是當年報韓客　圯橋何幸謁黃公。

圯橋何幸謁黃公　鬢髮如銀顏似童
紙上雲烟神入妙　腹中風雨氣吐虹。



腹中風雨氣吐虹　袖裡丹青奪化工
榮辱任他東逝水　一輪寒月玉玲瓏。

一輪寒月玉玲瓏　大澤深山望不窮
半夜頻驚十年夢　千秋遺恨哭英雄。

陰曆元日訪權溶鎭、席上進士某呼時遲期詩離之韻、頻求詩、率賦即似

半生淪落未逢時　欲抒襟懷下筆遲
故國山川思往事　他鄉風月誤歸期
微宵獨酌壺中酒　後世誰憐篋裏詩
客地頻驚烏兎速　今朝亦與一年離。

## 苦寒　古老曰、盖十數年來稀有之寒也云々

雪載風刀凛耐驚　凍雲羃々壓都城
衾單終夜眠難就　窓破暫時醉易醒
屋後嬰兒啼吐哺　庭前群雀默呑聲
無端憶起征韓役　嘗抗王師是此兵。

## 病中雜感

京洛長爲客　歲回未覺春　穉龍飢水澤
病鶴飫風塵　世事三歎息　人間一欠伸
棲遲何處是　嘯詠與誰親。

其二

讀書寧謬我　心事幾回差　經照太初月
亂開頃刻花　隱憂惟許國　暗恨豈忘家
夜半鐘聲斷　夢魂萬里賒。

其三

春淺寒砭骨　枕頭吹雪聲　弟兄千里別
父母五年情　窮達眼前過　是非身後明

恩讐猶未報　客恨向誰傾。

其　四

世路多崎嶇　劍書兩未成　飛鵬千里志
伏驥十年情　地濶秦雲隔　天高漢月明
青春行將老　獨坐對孤檠。

其　五

寒籟寂無響　掩書久喟然　東西三萬里
上下二千年　富貴如春夢　功名似暮煙
客居今幾日　搔首望蒼天。

偶　成　二月廿三日

豈是池中物　風雲未會時　慨慷唯對酒
涕淚弗堪詩　雁影春來早　鐘聲月下遲
粹壺歌且舞　憐殺丈夫兒。

同　三月九日

天地茫無際　幽居獨守貧　誰言麟閣相
自笑燕窠身　賣劍邀新友　剔燈伴古人
梅花今正發　案上一枝春。

雜　詩　二首

俯仰無慙意豁然　興來爛醉枕書眠
夢中相見呵々笑　不是美人不是仙。

三月二十三日

弊袍半敗髮如蓬　狂態依然蝸殼中
自笑江湖窮措大　有時借酒罵英雄。

三月二十四日

雨夜偶成　四月一日

蕭々無限雨　孤影坐三更　世味茶濃淡
人情燈滅明　學由困苦達　詩自靜閑成



富貴非吾願　一身存至誠。

四月二日次蒼樊見示之韻席上却似二首　蒼樊姓權名世鎭溶鎭兄、稍解我國語

貧富由來有所賚　弊裘未脫又三春
及時草木皆生色　愧我依然吳下人。
同病相憐是底賚　一年容易異鄉春
簞瓢只要娛天命　憂患寧多堂上人。

四月四日早起登南山　南山本名木覓山

一道長江流自東　楚山秦嶺恍難窮
狼烽臺上扶筇立　十萬人家指顧中。

四月八日曉起　再上南山

一江中斷越吳山　人在醒雲醉霧間
頂上遙望朝旭出　雙鳶掠我去來閒。

四月九日朝　三登南山

朝靄籠山不易攀　三溪何處水潺湲
草如雨後衣裾濕　迷鳥忘人入股間。

夜坐戲作　四月十一日

細雨初晴夜色新　酒痕空照舊精神
多情不亦風流客　春月朦朧望美人。

四月十二日石圓見訪、席上同賦、疊前韻　石圓姓韓名在益、善飲

春滿關山萬物新　此間底事共傷神
從容作夜交歡客　今作幽明相隔人。

友人邊錫然將赴任于釜山、二日來告別、越三日搭汽船出雲丸而發仁川、四日過金羅道所安島沖觸岩礁而沈沒于海中、乘客溺死者二十餘人、錫然亦其一也、錫然石圓之從弟、句故及。

次從兄大木見寄之韻却贈

半夜聽雞倚劍看　分野落々清與韓
丈夫壯圖試何處　區々不足摧肺肝
群小如今漫弄鼎　壯士當年髮衝冠
牛李紛々何日定　國步年々極艱難
弱之肉是强之食　那向古今不大觀
投機制勢誰能禦　謀成策立胸宇寬
嗚呼謀成策立不世用　碎壺仰天長鋏彈
衣敗肉瘦堆俠骨　鏡裏自憐形影寒
回首家鄉數千里　一聯歸雁飛入巒
感慨多少筆難盡　幾讀新詩淚不乾。

菊濟寄書問候以詩代謝

菊濟姓金名商五號三癸齋、精古文、秋史之姻戚。

遠遊寂寞暗銷魂　相遇一朝傾蓋論
文溯古經深造詣　書傳遺鉢極雄渾
功名半夜花開落　富貴幾時雲覆翻
尤感眞情如舊識　又披慰疏立黃昏。

五月三日

五月念二日同回天佐々木遊北漢山四首

北漢風光冠八方　危巖怪樹是軍防
投鞋來拜重興寺　度谷鐘聲欲夕陽。

重興寺夜坐似寺僧

天地寂無聲　人間夢忽醒　水浮山月淨
窓帶澗雲清　名利燈前散　色空心外明
禪房暫忘我　玄話坐三更。

望白雲峰　五月二十三日

拔地三千丈　巉巖勢壯哉　天低懸日月
突兀白雲臺。

白雲臺上所見

白雲臺聳壓靑邱　遠客登臨試壯遊
路入箕封通禹域　船隨漢水向神洲
一聯飛雁如龍尾　四際連山似虎頭
莫嘆人生知己少　危巖萬丈是吾儕。

六月十一日同市川晩矼北川東來佐々木回天等遊南漢山

火雲的皪欲焦天　午榻催眠日似年
徒苦釜中誰謂智　去遊南漢水淸邊。

山上口占次東來韻

行近城門山勢雄　吟眸無處不靑楓
開元寺畔涼如水　杜宇聲々暮靄中。

其二　再疊

峻阪爭先氣力雄　涼風贏得水邊楓
山門日暮僧房靜　無數螢光萬綠中。

西將臺偶吟　三疊

無忘樓上劒歌雄　怪鳥忽驚屋下楓
遺恨當年人不識　暫留征客夕陽中。

同渡邊大尉鐵太郎席上呼韻問間關

風雲未許一身閒　書劍但憐市井間
日暮蒼茫前路遠　回頭何處是鄉關。

歲晚蒼樊渦訪席上呼韻同賦

彈鋏幾時撫客衾　也逢歲晚感殊深
凍雲浙瀝風飄海　寒月慘悽雪壓林
世路迄今嗟凹凸　人生從古嘆浮沈
異鄉偏喜存知己　一夜守燈共醉吟。

除夜寄懷　本年六月遭父喪詩中故及

世味嘗來幾苦辛　萍蓬況復遠遊身
海遮內外恩殊切　路異幽明哀尙新
歲暮鐘疎欹客枕　月殘燈暗溼征巾
遙想今夜爲歡處　一坐團欒少二人。伯兄竹齋

節序匆々疾似梭　故園松竹近如何
寒風捲地行人少　亂雪蔽天歸鳥多
千里離家腸斷絕　九泉隔路淚滂沱
恩讎未報年云暮　泣讀先君辭世歌。仲兄竹齋
天寒歲暮客身忙　往事回頭夢一場
添煖衣多從友借　充飢食半賴人償
幾時彈劍心胸亂　萬里寄詩牙頰香
相別六年恨何極　滿城風雪欲斜陽。從兄大木

## 甲午集　明治二十七年

九月七日夜發龍助浦舟中即事　浦在禮成江岸

節近中秋愁緒多　迴江一夜片舟過
煙籠岸曲如樓峙　風送棹歌似笛和
月影浮沈舷外汐　水聲開闔艣頭波
遙懷北進從軍士　夢斫敵營起執戈。陰曆八月八日

九月十八日泊臨津江

日沒暮雲山不齊　風廻二水落潮迷
一行過雁秋將冷　舟泊臨津江口西。

龍溪村訪李某歸途囑日　九月十九日

重訪村家沽醉歸　山隈水裔影依稀
晚風斜日天如海　雲雀作群自在飛。

## 乙未集　明治二十八年

一月三十日踰西車嶺　嶺在黃海道瑞興府劍水驛之間

世亂書生思立功　仗刀萬里此從戎
龍泉館外行雲急　劍水亭邊歸鳥空
敢不徵臣誰盡力　豈令
聖帝獨勞躬　西車嶺上一回首
汗馬高嘶氣勢雄。

三月十九日早起同三谷通譯上于岫巖城後之山即事二首

水色山光春漸通　杖鞋解凍遍東風
城中喜見炊烟漲　一覩　君恩天不窮。
烽火影消殺氣空　滿城士女浴仁風
乘晴山上登高處　遙拜東天杲日紅。

謝張崇菴再用前韻　崇菴名九山進士

偶有靈犀寸裏通　儒衣道服仰高風
吐來咳唾珊如玉　寄我新詩誦不窮。

落々雄心欲搏空　朔方一月鵠長風
由君醫得胸中渴　何用愁顏借酒紅。

請和使李鴻章將上陸某欲殺之不果而就縛余聞而憐之

奮雷一擊欲椎秦　縛作楚囚痛恨頻
稱賊呼狂何足問　世間亦有識君人。

三月念七將赴于安東縣留別于同僚諸契

情交如骨肉　寢食共悲歡　聚散非私事
不歎世路難　重期相過日　努力且加餐。

次田島翁送別韻却謝　翁名彦四郎

奇緣自一叙平生　敎誨懇懃金石聲
縱使山河千里隔　敢忘寤寐魏公名。

落魄江湖過半生　疎狂動作不平聲
一朝幸遇風雲會　駑鈍空慙人後名。

次叢秀才見示韵却似　秀才名鶴才號勝萬

荒凉邊塞月　寂寞異鄉春　到處文章在
恍如見故人。

同　仿對聯體

山樓花片々　水榭柳絲々　羨子思詩夕
笑吾渴酒時。

其二

遷鶯風習々　歸燕雨絲々　遊子徊腸處
佳人額手時。

對月雜感前十五首　自東韻至刪韵

啾々鬼哭泣英雄　玉帛盟成萬骨空
遺恨山河如此好　戍樓影落月玲瓏。

百年涕淚酒千鍾　半夜慨慷書一封
事與心違常八九　殘燈如水水淙々。

赫々威容壓萬邦　偉勳千載世無雙
只今惟有舊時月　碧血空留鴨綠江。

凱歌唱罷欲何之　成敗回頭一局棋
虎搏龍攘誰忍語　杜鵑赤血割腸時。

山河百戰不堪欷　底事折衝亦逸機
憶昨滿韓千里路　鐵蹄蹴雪劍華飛。

西泊東漂志未舒　碎壺幾度擬焚書
月明今夜聞羌笛　夢遶南陽舊艸廬。

綏撫去年新設府　謳歌今日仰唐虞
一朝底事風雲變　遺恨千秋舊版圖。

夢醒半夜聽荒鷄　不是惡聲心轉迷
征馬空嘶人未返　一痕落月曲江西。

蓬髮弊袍天一涯　讀書萬卷事多乖
分明昨夜家山夢　付與嫦娥照竹階。

廿年知己半成灰　每讀遺書腸九廻
恨殺無情今夜月　清光不照故人來。

去年桑榆乾外共客死於朝鮮

獨上高樓別恨新　紅顏半欲老風塵
嵩雲秦樹君安在　月下朦朧愁慘人。

既知勝敗眼前分　斬將搴旗不世勳
意氣當年三尺劍　夢魂飛入北京雲。

詩成獨坐暗銷魂　夜半如人月上軒
要記扶桑男子志　身留一劍　答君恩。

百年治亂酒中殘　一代功名夢裡看

埋骨青山何處是　大鵬南去月光寒。
身臥閑窓心未閑　國驕無亦慮時艱
願埋一片稜々骨　魂魄長留天地間。

對月雜感後十五首　起先韵上威韻

海天一碧月如弦　蓬矢桑弓客上船
俯仰古今千載下　英雄回首即神仙。
一夜舉杯明月邀　塡胸磊塊箇中澆
賴君勿問邦家事　萬種愁來醉易消。
文章到處足締交　留與詩書百事拋
窮達任他東逝水　一天碧靄月梢々。
傾壺自有百觴醪　彈鋏豈無一代豪
憶起終南山下屋　漫空風露北辰高。

去夏韓山風雲俄勃、有志之士相踵而來、寓于予南山舊居者衆矣、酒酣耳熱、慷慨之聲、往々溢屋外。

戊月影沈亂楚歌、　慨然投筆渡江河
奮鵬千里湖南道　把臂淋漓意氣多。
擬塗肝腦護邦家　帳下日傾悲暮笳
呼做逆臣君當笑　英雄末路不堪嗟。

客年七月清兵據牙山日軍扼漢城、或謂不戰而撤兵、予聞而慨之、月之六日、孤劍飄然經忠清至全羅、會東學黨首全捧準于綾州屯營、把臂談國事、慷慨繼之以淚、何料本年五月、捧準被縛而至漢城、從容處斬云、想當時而不禁舊懷、二首及之。

北馬南船客夢忙　燈前酒後旅情長
無端今夜杜鵑叫　遙望美人天一方。
護家孝子見眞情　竭國忠臣推至誠



昨夜東天雲色惡　莫爭勢利覆金罍。
烟絕殘爐香更馨　閑鷗流急夢初醒
人間蓋棺論應定　留取丹心照汗青。
稽古徵今層幾層　喟然掩卷對孤燈
十年有恨河邊柳　一世無心月下僧。
半生好作四方遊　流轉恰如不繫舟
李奪牛爭那足說　立功異域勝封侯。
胡月半沈夜氣深　風雲暗憺古鷄林
懷柔亦誤交隣策　腹背依然吳越心。
前狼後虎視耽々　覆雨飜雲豈限三
試舉古今興廢迹　百年大計對誰談。
奉身自厚有何廉　持正挫邪被俗嫌
畢竟世間吾不伴　天邊只見月纖々。

烏鵲南飛月半銜　乾坤到處涇征衫
莫將成敗論功過　瘦骨稜々志不凡。

僚友伊東良造接父君病篤之報、倉皇乞暇而還國、未到家、父君已逝、予聞之哀悼不能禁、率賦以贈

百戰功成奏凱還　夕煙飛處是鄉關
家人相見皆無語　顧指後堂淚自潸。
忠孝古今不兩全　痛哀罔極訴昊天
分明昨夜承歡夢　髣髴尙疑己化仙。
莫擧酒杯唱凱歌　々々使我涕滂沱
人生漫作四方士　到處不堪痛恨多。

往年予在朝鮮、亦接家嚴之訃、慟哭不已。

秋　興　叢篇才示以後聯二句、予補足之而成一首

秋促人間灝氣清　疎籬如水晚凉生
天高健鶻將無影　草秀暗蛩既有聲
詩酒且圖今日興　功名休問幾時成
從軍亦是他鄉客　落月殘燈坐四更。

十一月三日憲兵諸子欲製額以駕聖節、徵詩於予、事太急、乃猝然奉賦

杲日麗天白鶴橫　瑞雲掩映綠池平
恩霑隣國仰千古　威壓邊疆耀八紘
塞北山河似星拱　臺南草木若葵傾
乾坤到處皆和煦　嵩嶽齊呼萬歲聲。
壽色南山碧　曈曨東日紅　恩湛千里外
威耀五洲中　窮巷齊懷德　都門永頌功
去年廣陵路　旰食勞　宸衷。
王師去歲新開府　堯雨舜風日月長
寥廓秋天羽鶴舞　衣冠同奉萬年觴。
盛德包天地　神威絕古今　楚烏屋喧上
遼豕睡棠陰。

## 丁酉集　明治三十年

二月五日率賦、戲示同僚諸子

蓬矢桑弓知幾年　韓山遼野迹茫然
暫收捲起風雲手　笑把兎毫耕紙田。
予時入外務省編纂課而爲寫字。
擊柝抱關未媿天　辭尊避貴亦因緣



賴君莫哂俸銀少　半月足仍充酒錢。

次聽泉翁閑居二律韻賦贈
翁姓寺田名實、三月二十四日作

流水桃花別有天　柴門深處絕塵煙
盤根錯節身先試　易俗移風志未宣
涕淚幾時焚筆硯　慨慷一夜遁林泉
壺中但醉千秋酒　野鶴閑雲足暮年。
短檠銷盡夜漫々　月下朦朧酒上盤
萬古冰心梅樹々　千秋鐵骨竹竿々
興亡幾向碑陰哭　窮達偏爲盃底看
欲語人間多少事　何來雲鶴一聲殘。

## 戊戌集　明治三十一年

雜　詩　一日一首以代日誌

步趨未得與人同　後樂先憂跡亦空
尚有天恩無不至　蒼松引我浴春風。
予卜居于南山麓、庭上有松二三株、故及四月一日。

嫩草抽頭曉露濃　南山半見白雲封
三竿日出人猶夢　黃雀喈々與我從。
二日曉行

代天垂大統　一系世無雙　遺烈仰千古
餘光照萬邦。　三日神武天皇祭

尚有棄繻志　豈無投筆時　青春還不再
愁殺個中兒。　四日口占

萬里雲山客未歸　每思老母淚霑衣
枕頭一樣今宵夢　偏向春光閣上飛。
五日、接櫻庭未吉北堂之訃、不堪懷鄉

學涉東西未廢書　人因貧富世交疎
及時但有杯中物　一刻千金月上初。
六日陰曆三月既望

刮目士三日　瀝肝酒一壺　丈夫重意氣
不暇問榮枯。七日口占

一朶香雲望欲迷　半簾朧月影高低
多情亦有揚州客　醉向酒樓壁上題。
八日夜、中島君司馬之助招飲于井門樓、後與氏及菊池玖春同拉歌妓而再飲于掬翠樓

春季多情趣　幽居雨最佳　客來呼不起
夢與莊周偕。九日雨

底事世人但好財　素心要見一枝梅
讀書樓上茶初熟　莫限春風如客來。
十日即事

殿閣東西十丈塵　南山北岳二分春
城中四萬六千戶　總是醉生夢死人。
十一日市內散策

幾隊健兒分作群　鬪奇逞巧視紛々
場中可莫驚人術　擬樹酒軍第一勳。
十二日見招于軍旗祭

不解箇中趣　焉知天爵尊　書兼今古讀
道入有無論　茶伴花三點　酒朋月一痕
献芹猶未己　寤寐思　君恩。十三日感書

不是溪間草　十年襟未乾　故人多歷落
世路幾艱難　月出浮雲蔽　花摧細雨殘



勿言天下事、應作夢中看。十四日偶感
來亦無心去亦閑　暮雲朝靄對南山
束將縛虎拏龍手　時閱舊詩筆自删。
十五日

百年誰莫死　相踵忽黃泉　治亂眞如夢
功名亦似煙　醉沈千日酒　擲盡萬緡錢
我愛長安客　一生市上眠。
十六日夜蟻生君十郎招飲于掬翠樓

## 已亥集　明治三十二年

秋夜　十月十日

霜落磵聲急　書燈暗恨多　古人招不返
奈此月明何。

十月十一日席上似李濠觀疊前韵

天地能容物　文章知己多　誰言梁棟器
樗櫟若儂何。

又

只樂夫天命　客來興趣多　秋風催老早
不飲竟如何。

趙某義惠來訪席上書示

雅客來於遠　欵談日已中　人心無上下
國土有西東　治亂世相似　毀譽時不同
祇應愼其獨　蹇々奉天公。

偶成

焚書投劍避風塵　地厚天高堪處身
掩耳盜鈴何謂智　殺牛矯角豈稱仁

猖狂沅籍惟酖酒　迂拙顏回獨守貧
得失誰知千載下　汗青照見古之人。

## 庚子集　明治三十三年

次難波鶯所春吉元旦韵却似

旅食半生亦可憐　典衣換酒漸迎年
三元永解溝中鼈　六合雲開天上鳶
民守家風相緝睦　君遵祖法幾連綿
同逢聖世猶如此　俯仰搔頭一惘然。

次鶯所人日韻

文章事業兩無成　容易春風動客情
尙謝貧時交未棄　故人餽我薩摩羹。
欲寄家書々未成　年々人日故山情



東風爲我能傳語　也見梅花喫碗羹。
劉跛子喫碗羹

## 辛丑集　明治三十四年

和長風菊池謙讓雜艸韻三首一月二十五日

茅廬早杜門　獨對前山雪　治亂孰英雄
縱橫惟草竊　一壺酡易醒　萬卷書難覈
往事復休言　夜深心鬱結。

其二

彈鋏長爲客　剔燈時講經　人間何齷齪
天下一玄冥　幽鳥樹遷樹　蟄龍夜涉溟
行藏今似夢　坐見斗牛星。

其三

透得無門境　共誰忘世機　智才新印綬
氣節舊簑衣　貧富論成敗　興亡關是非
斯人終不見　散髮亦何歸。

廢壁春　漢城新報課題三月十三日作

陰之山兮陽之水　神斧鬼鑿築作壘
曲坊四通分士民　穹門八達隔都鄙
殺活總攬天下心　順逆仍據王霸軌
那使草竊衆邊疆　萬古擬傳孫與子
風雨春秋五百年　一盛一衰奈泰否
老驥夜逃志徒焉　牝雞晨告事已矣
投鋤耕夫多爲奴　斷機織女盡思妓
求道不遠一回頭　治亂渾存蕭牆裏
俯仰暫駐行客車　況亦東風吹不止
城壞國亡有誰憐　宗廟幾歲絕祭祀
李花一枝月黃昏　殘壁半面纏紫藟
滄桑何處弔英雄　惟見水流而山峙。

雜詩　以詩代日抄

九月一日晴　二百十日

斷續雲低夕照紅　關心明日雨耶風
今朝喜見天空靜　笑向丐人說歲豐。

末松某懷穉狗而至曰養人不如飼狗、余戲以詩衍其意即示

養人不若飼狗好　一語喝來氣吐虹
三人相集惟談利　未聽年々國力充
梁上君子時擅寵　綠林豪客儘誇功
痛憤幾度擬浮海　殷憂當日欲書空
兀々講學何行得　粒々辛苦身爲崇

胥盜戕民誰忍說　飼犬防盜策太工
請看邦家盛衰理　先義後利古今同。

二日晴、曉起看花

塵寰半見曉雲封　落月殘星三兩鐘
借問牽牛花帶笑　剪紅裁紫爲誰容。
草色籠秋白露濃　十年書劍奈游蹤
一朝開落花何限　回首人間夢幾重。

三日晴、夜坐

獨座夜深月到窓　半庭老樹影成雙
百年心事依誰語　明月清風酒一缸。

四日曇　宮中使聘各道妓生而習舞樂、賞賜有差。

願使後昆燿盛儀　有誰爲進九疇詞
賜金千鎰君恩大　底事群臣拜舞姬。

五日半晴、偶成

且廢詩書久　黃昏早掩扉　愁思憐面瘦
癡性笑腹肥　千里母催老　十年兒未歸
秋風吹欲遍　哀雁一行飛。

六日晴、戲示

利奔名走事粉如　暮夜門前客駐車
擬掬水中明月去　攀援憐汝學猨狙。

七日萬壽節

遠近齊稱壽　嵩呼撼帝都　紫雲繞魏闕
丹日照康衢　萬國衣冠會　兩班車馬趨
誰將匪躬故　蹇々贊皇謨。

八日曇　有故金永準復官之說

胥從上下事排擠　一夜君王獨噬臍
聞說亡臣魂未瞑　鳳凰閣裏晝凄々。



九日雨、偶與舊友深水十八遇、痛飲徹夜

南船北馬好生涯　舊誼十年別後佳
休說東西今日事　慘風悽雨不堪懷。

十日晴、送別

臨別莫辭酒百杯　青年馬上鬢霜催
他時亦見莊臺月　一劍風雲志未灰。　深水君住牛莊

十一日晴、鶯所寄書曰不日當提松茸而上京

避跡山村知幾人　稻花麥浪好天眞
雨多秋蕈香應熟　不管同斟爲酒貧。

十二日晴、偶成

歸鳥亂飛欲夕曛　客蹤回首思紛々
話頭尤悸當年事　俠氣三分酒七分。

十三日晴、往仁川、迎小村星使壽太郎而同還京、即事

十里秋風鐵路奔　行過荒野又寒村
天空海濶仁川港　杲日曈曨耀海門。　星使搭海門艦而歸來
黑龍蹴浪萬鱗奔　濟物浦頭旭旆翻
爭鹿場中誰第一　故人遠返自古原。

十四日晴、京城郵便局行落成式

遞局竣工磐石安　層樓鱗壁足壯觀
誰悲千里知音少　地角天涯看一看。

十六日晴、淨瑠璃慈善會自昨夜開場云

慈善會開別有天　粉雲香雨客摩肩
鄭聲衛曲君休問　鰥寡東西今古憐。

十七日晴、客來作逋客還國之說、戲示

暗中有物手如招　錯視飛茅魂欲消
昨說滿韓今逐客　由來民俗一輕佻。

十九日小雨、獨酌

一年仍有百年醪　百世豈無一世豪
此夜王郎拔刀舞　天風吹髮北辰高。

二十日晴　國王幸于雲覩宮

地下英雄恨奈何　蒼苔白草歲華過
月殘客去秋肅瑟　雲覩宮荒落葉多。

廿一日晴、隣家夫婦喧爭不絕。

旗亭沽醉夕陽斜　此夜郎君未返家
妻渴兒飢今幾度　秋風無日不喧譁。
俚言口爭力鬪稱喧譁

廿二日晴、詣本願寺而拜亡友遺骨

八年風雨夢蒼皇　說到吾兄淚雨行
爲問幽魂今在否　遺將白骨使人傷。

廿三日晴、與友語、同笑

書劍十年事遠征　此生被半謬才名
向人尙問舌無在　笑對秋風說晚成。

廿四日雨、偶成二首、此日當彼岸仲日云

落葉催秋早　龕燈入夜青　人間知幾歲



獨坐雨冥々。

其二

秋色人間至、砧聲不暫停、欲呼亡友起
一夜祭精靈。

廿五日晴、舊友相會、酣飲徹宵

不以才稱以酒稱　一生只願了無能
憑君且謝風雲事　即是人間有髮僧。

廿六日晴、夢游歐洲

鵬程直度萬重秋　談笑亦何玉帛修
米水歐山行欲盡　夢間恨未得封侯。

鰲背跋波夢遠游　五洲到處足朋儔
睡魔忽破吾如故　夜色蕭條不耐秋。

廿七日晴、中秋

人生幾度嘆浮沈　明月千秋照古今
思到鄉家誰莫淚　一年憂在此宵深。

隣家警察署失火

幾處山樓又水濤　一年今夜賞心深
祝融底事漫爲戲　遮莫仲秋不耐陰。

置酒誰爲秋夕吟　火龍逞勢月光沈
人間憂樂何常有　照見眼前今夜心。

廿八日晴、僅免類燒、故舊惠酒多

昨夜寒翁禍福參　一顰一笑四災談
自今穀價不憂貴　囊底無錢酒滿罈。
震、雷、火、盜、俗稱四災。

廿九日晴、偶登南山

故迚細徑步纖々　松翠楓丹信手拈
最好山中無寺剎　溪流響處鳥空覘。

三十日晴

不是謫人亦淫衫　秋風吹客月西銜
詩成三十眞徒事　笑付火中書一函。

## 壬寅集　明治三十五年

新年作三首

亦遵嘉例迓新春　暫改冠鞋忘我貧
麟閣當年存故舊　蝸廬今日足同人
君仁臣勇甌無缺　客献主酬酒有因
聞說移民法將布　皇風吹遍不揚塵。

其二

每逢歲旦且逡巡　依舊劍書托此身
惟有酒量能壓客　竟無詩句以驚人
江南父老多歸楚　漠北子孫半避秦
紛殺中原還逐鹿　獨傾太白醉長春。

其三

夢裡匆々歲月頻　霜髦已見鏡中新
如何世事三歎息　究竟人生一欠伸
恨未乘黃鶴俱去　願當與綠酒相親
却憐多少江湖客　半喜功名半患貧。

對菊書感

歸去來兮計欲窮　分明昨夜夢陶翁
寒巖落木秋寥寂　僅得菊花貫酒紅。
哲人未必說遭逢　當面寸機在折衝



欲往從之一廻首　空山漠々水重々。
歷々興亡幾舊邦　喟然掩卷對殘釭
人生願醉黃花酒　隨處江湖泛小艭。
憐却當年游俠兒　賣書典劍欲何之
荒庭猶見凌霜菊　晚節秖應與子期。

## 癸卯集　明治三十六年

杏花　課題代某氏作

城北城南處々栽　水亭山閣客徘徊
十分春色杏花好　併得桃紅李白開。

桃花　同上

東風吹滿武陵春　水盡無由復問津
兩岸桃林花繚亂　洞中知有避秦人。

溪堂（瓶江園次郎）見似初夏遊三溪洞石坡亭雜咏五首即次其韵

一亭斜負虎嵒橫　蒼落半天雲樹平
憑弔英魂呼不返　前溪啼度子規聲。
老松巨石幾千年　纔出都門別有天
一代豪懷欺客好　晴耕雨讀宛如仙。
洞門畫掩靜山莊　人去白雲深處鄉
遺愛藤花依舊麗　薰風四月亦廻腸。
獨上危樓思索然　眼中人老半黃泉
依稀石佛今如昔　松琴水瑟不絕絃。
緬想長虹舌捲風　時拋彩筆臥林楓

斯翁逝後青邱寂　人立微茫夕照中。
朝鮮一名青邱

次西川浩世見示韵却似

擊筑浩歌遊子吟　數奇到處嘆浮沈
朝三暮四唇亡齒　伐異黨同口鑠金
詩陣酒兵新領土　高山流水舊知音
池龍尙帶風雲氣　照得殘燈一片心。

其二

碎壺撫劍伴孤槃　夢斬鯨鯢意氣橫
身世豈無風樹感　芭蕉窓外己秋聲。

## 甲辰集　明治三十七年

元朝口占

飄風亂雪古王城　天日無光鳥不鳴
儘使偷兒窺臥榻　徹宵按劍迓新正。

聞捷報

天佑炳乎王者軍　捷書今日雪紛々
既知勝敗論當決　誰是先頭第一勳。

重陽

晝短深秋覺夜長　居諸容易也重陽
浪高北海鯨魚吼　風靜南林鳳鳥翔
取義捨生臣子分　挫强扶弱丈夫常
相逢同醉黃花酒　萬古皇謨仰國光。



## 乙巳集　明治三十八年

和聽泉翁御題新年河韻

東風解凍瑞煙濃　滿帆載春水蕩溶
餘勢高揚蒼海浪　源流遠出白雲峰
邳橋奉履英雄跪　渭岸垂鉤聖主逢
更有天淵深叵測　千秋威德仰神龍。

次蜀山岡本五郎見似韵

翻覆底心出岫雲　秋風髣髴不堪聞
烏飛荒野髑髏哭　月落陰林魍魎分
燈火十年惟愼獨　波瀾一代孰超群
眼中客去今焉在　世喜小康人弄文。

## 丙午集　明治三十九年

次蜀山叙別韵席上即贈　一月七日

尙憾春風吹不遍　沈吟相對一燈幽
問君明日那邊去　唯道山高兮水流。

和小棠金興準自笑詩韵却寄

七十六翁金小棠　怡然開口自稱狂
笑詩吟罷晨焚硯　虎字吼來夜撼堂
萬里游蹤囊底納　半生苦節盞中忘
能安天命身初健　延壽如雲望杳茫。
翁揮虎字數幀而贈余

和某翁失名米壽自祝詩韵却寄

高橋鶴洲囑

天地悠々寄此身　送迎八十八秋春
對翁休問長生術　壽福古今屬善人。

但將詩酒樂天年　身後功名付自然
恰是王師凱旋日　櫻雲深處好開筵。

偶成

也憐吳下舊阿蒙　落葉已多半夜風
市賈持廉財不利　洞仙窟節計逾窮
學非忤世言爲累　酒易亂心愁作攻
獨上高樓思幾許　滿天一碧月如弓

十一月三日阿部正孝小杉謹八飯塚彦次郎號鵜涯三氏見訪、鵜涯示以弔古二首即次其韵却似

欽君心境絕塵埃　自謂明時失脚來
百代興亡詞客淚　新詩先灑古樓臺。
朝來呼酒夕陽斜　顛倒亦何辨鷺鴉
醉死不休君莫哂　天長佳節燦黃花。

## 丁未集　明治四十年

偶成戲示債主某一月念三

回想世事亦逡巡　迎接韓山十七春
非業弗勤常苦債　無情不盡動傷身
鳥啼清晝花爲友　酒熟深宵月做賓
腹笥猶藏書萬卷　初齋居士未全貧。

樓上對雪即事　余頃起臥于四層樓上故及、十一月念七

欲令人意新　一夜乾坤白
不用起乘舟　臥看樓上客。

其二　日出雪解軒滴如雨

紅暾煎白雪　擔滴瓔成紋
半日晴天雨　行人不得聞。

樓上戲作

雨過如決堰　風起似搖舟



中有忘機客　端然獨坐樓。

其二

四層樓百尺　擬入月宮遊
但怯雷霆近　有時搗斗牛。

## 戊申集　明治四十一年

東京客舍偶成　四月十五日

艶陽四月雪紛如　十一日東京地方大雪
天示變爻儆起居　到處馳驅皆逐鹿
政友多赴于選擧區而無居家者
隨時遊樂獨騎驢　例無杖履殊驚俗
猶有琴棋善解余　十三日下午投于紀伊國屋旅館々主以茶室充余寢所
開落櫻花知幾日　客窓靜閱牧民書。
予携冽水丁鑄所著牧民心書有暇則讀之

客舍偶見壁上懸叔兄竹園遊墨水歌書感　舍在上野山下　四月廿三日

壁間偶挂叔兄歌　卒讀不堪淚自和
花至晚春憔悴甚　人緣早世追懷多
夜深後嶺疎鐘斷　晝靜前樓微雨過
訣別匆々十三載　音容彷彿影婆娑。

日比谷公園即事　五月二日

躑躅花開風欲燃　滿園子女影如煙
及時行樂昇平象　叫血無人語杜鵑。

歌舞伎座觀都踊　同日

玉燭錦幃映眼濃　鶯歌燕舞洽時雍
謫仙成句非徒爾　雲想衣裳花想容。

龜井戸即事　五月三日

佇立鼓橋頭一傾　三千老弱若爲情

菅公祠畔梅花盡　惟有紫藤今擅名。

搭乘合船到于四目牡丹園途上

帽影釵光艇々頻　往還盡是翫花人
肅然中有無言漢　寄跡風流暫避秦。

牡丹

此花一發百花空　恍在巫山雲雨中
秉燭徹宵應盡醉　紅羅翠袖不勝風。

其二戲作

天香國色兩無窮　却使君王覆漢宮
富貴比人未知可　世間漫擬統監公。

愼祐一郎向溫陽開城而爲修學旅行夜坐口占　十月十七日

長行溫邑幼開城　卓上不禁寂寞情
勿賴秋風吹落葉　半宵睡覺旅魂驚。

## 己酉集　明治四十二年

戲題糸瓜　十月十八日

憐汝本來無用物　長顏便腹任他嗤
那知一滴通神水　始驗巫醫避席時。

## 庚戌集　明治四十三年

元日

風歇雨收曙色新　團欒相賀一家春
折腰斗米任君笑　聖世亦非游食民。

一月十六日口占、示于同僚諸子

暗雲蔽日雨沈淪　不似變調去歲春
最怪盜鈴仍掩耳　偏憐抱玉却緘唇
燈花頃刻風前盡　松色百年雪後眞



修養有因須正己　世間憾少讀書人。

前日吏員數名被總

病中自嘲　八月十日

火雲爛不動　炎熱欲燎空　憐爾初齋子
呻吟病蓐中　自誇身常健　酒國壓群雄
死生默不答　但言窮云通　一期天作戲
四肢攣似弓　抉肉兮砭骨　氣息奄如蟲
慘苦今知否　敢謂醉有功　不見平生勇
笑殺蓄髯童。

## 辛亥集　明治四十四年

元日口占

先賀人心改　朝來瑞雪斜　黃昏天似拭
寒月照梅花。

## 癸丑集　大正二年

九月九日夜坐即事

何處秋聲至　仰天銀漢淸　人間皆似死
蚯蚓獨悲鳴。

## 甲寅集　大正三年

元朝口占

整衣東向拜曦光　遙頌萱堂壽而康
春晚好携妻女去　閒雲野鶴訪家鄉

偶成　十月八日

鼠腹鷦巢分有餘　窮通於我竟何如
覇圖似夢行消盡　剩得半肩一荷書。

## 乙卯集 大正四年

三月一日雪

漢城春似故鄉春　三月北風捲雪頻
瓶裏水仙永又結　最憐老病怯寒人。

口占 近來借家又乞錢人而踐行其債務者太寡 借法華經中之語

沒却當來念　焉知因業分　唯然多兩舌
信記總空文。

聞野平靖男病篤 三月二日

死生雖有命　悲報不堪多、況是壯年者
嗟如遺族何。

戲作

三寒漸逝四溫廻　曝背群雞臥拂埃
天候動人還可笑　老妻昨夜月經催

偶成 一郎勉强過度

徹夜將三日　勉强令客驚　苗長非手揠
修在平養生。

病床雜詩 六月念八

當年意氣竟如何　節入黃梅又病魔
三日呻吟終絕飲　衰驅追夢手空摩。

石竹數莖次第開　花如飛蝶趁風回
身過二尺高還可　病床偏添微笑來。

葡萄蔽日晝成陰　驟雨乍晴塵不侵
誰識無想無念境　半簾微動午眠深。

牽牛花開 六月三十日

此日牽牛花始開　似揮白刃劈奔雷



不須銷暑勞心氣　案上偏添涼味來。

偶成 八月六日

是佛是仙彼一場　詩書萬卷牛荒唐
酒因爛醉能消暑　月到深更儘占涼
開落等閑花短命　去來倏忽鳥回腸
久拋世事兼人事　榮辱百年不要償。

天長節祝日

臣等逢佳節　以何表至誠　同斟黃菊酒
讙笑樂和平。

大典恭賦 十一月十日

咨朕統承爰代天　雙懸日月景雲鮮
舊新臣子二千萬　齊仰東南頌億年。

## 丙辰集 大正五年

元旦口號

恭迎大正五年春　每遇元朝感更新
義則君臣情父子　黎民不孰竭心身

元日雨戲作

天使金雞蚤告晨　先施恩雨歲爰新
萬家忽見炊烟上　應識今年是丙辰。

干支日當酉、年當辰、故及

理髮館似某爺 一月十二日

天子憐者老　新春又遇君　不辭童者伴
諧謔獨超群。

夜坐即事 一月十九日

曲肱妻已睡　寂似坐山中　終夜思無益

挑燈醉眼紅。

一月念一日口占　大寒日

節入大寒反不寒　凍皺交語去年酸
剩聞窓外蕭々雨　坐臥雖安心未安。

復和田京南　一月念四

春信遙從海島傳　梅花如雪月如煙
憶君浴後凭欄夕　一醉陶然身欲仙。
東風無處不烟霞　昨在崎陽今浪華
爲問江南江北路　一春幾度賞梅花。

節分偶拈　二月四日

飲食隨時足　一家皆息災　追儺那撒豆
禍福自中來。

紀元節日某友來飲即似　夕雪

倒屐邀親友　先開北海罇、襟懷清若雪
飛舞欲黃昏。

二月十五日夜雪訪宮館氏

忽拈白雪打乾坤　直視天心月一痕
不是山陰乘興客　深更來叩故人門。

深夜客來飲　二月廿七日

有客微吟帶醉來　時鐘一點未停杯
追思自笑當年事　梯飲拉妻知幾回。

悼井上信　二月廿九日

論議文章成一家　厄齡作讖轉堪嗟
飲仙倏去春寥寂　前轍誰人戒後車。



長野某以碑右充于借家料戲

作　三月一日

素飡數月債難支　以石代錢計太奇
石不泯兮錢易散　留將身後勒名碑。

三月一日訪客頻至、口占

縱心所適亦難哉　過客相尋去又來
今月事於初日卜　世間未許老蒿萊。

偶成　三月十三日

懐古慨今夢一場　及時爲吏又爲商
昨非今是復休問　只要人間老醉鄉。

三月廿四日雪積寸餘

日影糢糊似曳霞　繽紛亦見鷺毛斜
柳梅不恨春來晚　頃刻忽開萬樹花。

早曉即事　三月廿一日

梵鐘隱々報天開　軋々電車待客來
誰謂春眠不知曉　張爭李奪自茲催。

憶故金玉均　四月六日友人晉謀於南山本願寺開廿三年忌追悼會云、予以病不會

把臂浩歎夢幾牽　春風容易廿三年
英雄地下應無悔　旭日懸天八道鮮。
蜩鬚何能識大鵬　黨同伐異事烝々
故人志在百年後　身戮始知天日昇。
於大逆無道玉均　罪科至此可寧珍
楊華鎭畔一回首　慘雨悽風不耐春。

數日曝玉均死屍於楊華鎭、大書于其側曰大逆無道玉均、句故及

有誰掩而不悽淅　碧血爛斑曝屍時
料識聖恩及枯骨　滿堂如水表彰辭。

友人小林代議士勝民提出玉均功勞表彰案於議院而滿場直可決之云

死作忠臣生逆臣　回天志業蓋棺伸
即今那料廟廊士　多是乃公門下人。

現今鮮人之立于要路者大抵承故人之知遇

名古屋城不日見附于競賣云

書感三首　城係于予所建造者而往年之住宅也、四月十七日

突兀城樓聳半天　歷來風雨十三年
骨摧肉破今安在　遺影才留尺幅箋。
來者重兮去者輕　死歸黃土若爲情
轟々一夜乾坤拆　千古無人語鯱城。
曾在浪華驚市人　更來槿域又無倫

榮枯奚復論今昔　吁爾與吾有宿緣。

四月念三雨口占

矛盾雨端不可裁　問君何樂復何哀
今朝一樣肅々雨　南地花零北地開。

五月一日牛耳洞觀櫻行雜詩

觀櫻未暇問陰晴　開落瞬間最有情
微雨肅々長短驛　客車二輛漬人行。

南大門驛發觀櫻列車二臺滿員無立錐之地

帽影傘光如貫珠　羊腸路入彩雲區
風流亦有跨驢客　展出南宗一幅圖。

倉洞驛土人曳馬而呼客、々爭而乘之

路至白雲臺下盡　澗流何處響潺湲
爛漫忽見花千樹　人在白雲深處村。
北漢山危勢欲頹　輕嵒奇石水縈回
斯山斯水清遊足　矧亦名花萬朶開。



天長節祝日

秋高朝日麗　風煙菊花芳　壁上懸
宸筆　陶然醉壽觴。

立太子禮日　十一月三日

於皇親錫劍　寶祚億斯年　雙鶴晴空舞
旭旂萬戶鮮。

獻若于金於天滿宮改築費併
示勸進者某氏　十二月一日

不禱何辜誠厥心　厭看佛佞又祠淫
神明照鑑君休咎　貧者一燈勝百金。

菅公咏誠心歌

松原榮需母堂喜壽詩　十二月廿二日

奪劍斷機事已煩　直將仁愛濟兒孫
春風七十又加七　南極高懸孝子門。

吾母八旬有五庚　雲山相距若爲情
羨君常侍萱堂側　欽見年々松栢榮。

前題爲某氏代作　十二月廿六日

古稀七十七慶辰　壽福由來有宿因
賢母良妻誰得比　巖龜松鶴一家春。

## 丁巳集　大正六年

丁巳口占

也免饑寒逢歲新　老來逾覺醉中眞
利人益世非吾事　甘作太平無用氏。

賀喜壽代某氏率賦　一月廿日

康壽兩全知幾人　蒼松千古是前身
亦欣膝下兒孫繞　占得和平第一春。

# 戊午集 大正七年

新年作次阿兄竹齋見寄示韵

雪霽曙光輝碧穹　席多醇客自春風
等閒四十九年夢　笑殺人間知命翁。

一家皆健又迎年　甥姪新妝繞膝前
餞歲且欣交友贈　後厨魚鳥引繩連。

水仙雜詠 有序略

識否膏粱寧害身　一生得水不憂貧
尙令主客能催醉　金盞銀臺獨有春。 支那種

薤葉葱根誣世多　薰蕕如彼奈吾何
等差孰與寒梅比　雪白氷清磨不磨。 俗稱白房咲

銀臺金盞夙相傳　千辯始知眞水仙
黃玉玲瓏王者冕　花高葉短酒茶前。 俗稱八重咲一名玉玲瓏其色黃

敢列桃紅李白班　滄浪濯足追塵寰
問君開口吐何氣　笑而不響心自閑。 俗稱喇叭咲、結用古句

比耶信士 原名

欲配歲寒君子儔　仙槎萬里古瀛洲
幽香不但如蘭蕙　於葉於花拔一頭。

送石原君赴于新義州 三月九日

鴨綠江頭雪繽紛　統軍亭上日將曛
朔方好是風雲會　欲樹人間第一勳。



宮館君與關屋學長謀、以勸予爲某校漢文講師、戲作詩代答 四月五日

學問文章無定師　僅窺門戶入堂遲
日常但有讀書癖　謬以儒生見世推。

其二

賢者守賢愚者愚　老來有耻役形軀
山妻爲我指天誓　尙莫十年饑渴虞。

偶成 四月廿六日

遠近無山不彩霞　柳亭杏樹酒旗斜
三春興趣因人異　客見花忙我養谷。

南山董

尋花先嗅暗香淸　曉露晚風最有情
一見曾承名士寵　譜中新占統監名。

住年青木前外相來遊于京城觀南山莊玩賞不措、又曰伊藤侯就任于韓國統監、始開統監府於倭將臺、時人稱南山莊而呼統監莊、韓結故及

點燈草 俗稱藤牡丹

不是牡丹不是藤　每經寒暑氣峻嶒
黃昏有酒客將煖　簾外乍觀萬點燈。

海棠

七年始發一枝春　花不願多卻可親
朝雨暮風齊俛首　慇懃有似謝恩人。

往年隣人偶投海棠一株而去、予拾而培養之七年于玆、今春始着花十輪、或云棠梨

公孫草 或謂苧環

剪取公孫樹一枝　著花枝上復奚疑
青衣似捧瑠璃爵　恰是君王賜宴時。

御柳

任使呼爲楊柳儔　疎枝密葉綠陰稠
征人只悃相思別　故避河邊不繫愁。

蘆

一葦遙凌萬頃流　青蓑帶雨宿閑鷗
好齋江上淸風得　吹滿橋南處士樓。

芍藥

國色天香未足誇　揚州四月鬪豪華
誰言唐代無吟詠　故厭詞人不著花。

余植芍藥數根、年々葉繁而花不開、結句戲及

躑躅

段憂萬斛血痕濡　老去唯憐形影孤
還好旣無開落累　夜來風雨不關吾。

庭上有躑躅二株、往昔花盛開而近年遂不開句中故及



樅

挺身擬直上靑空　晚節或與松柏同
願借他時良匠手　勿嗤材大世無功。

玉蓮

八面玲瓏花似蓮　是香是色自超然
却憐竟出深山裏　不伴高僧伴酒仙。

我國紀州大峰山中多生此樹土人稱大山蓮華云、大峰由役小角開基之地也故及

楓　羽團扇楓、又名雞冠木

詎妨稱械將呼楓　幾遇嚴冬力不窮
設愛晚秋紅葉麗　春花夏實更深紅。

山葵

鄉人有遠饋山葵　試盛細砂葉益滋
盤上摘來味殊好　鮮鯛新芋作媒時。

蒿

綠衣如水自生風　晴卷雨舒命不窮
憐汝收攀臺閣手　跼天蹐地瓦盆中。

盆松

公議正論彼一時　民團制廢歲華馳
何人爲捲風雲起　盆裏臥龍總不知。

自註、民團制以大正三年三月三十一日被撤廢、時人慨之、越四月三日爲紀念植樹於南山、余乞稚松一株、歸家而植之于磁盆、蓋亦欲不永忘當年耳、松今存矣、詩句故及

諼草　一名萱艸俗稱忘憂草

欲忘世路百憂來　手避南庭屋後栽
相見却多遊子恨　即今應在墓門開

我東北地方多見此花于墳墓之間、又云今春予遭母喪

待夫花　自註、松尾某寄草花一株、培養數年蕃殖作叢、但不知其名、家人呼稱松尾花、待夫松尾和訓相通故名

誰家淑女曉凝妝　惟見羽衣與霓裳
薄命縱無僧老契　鑫斯揖々有餘慶。

近午花萎

柾木　似櫟

佛前供養有那緣　寄跡山林豈學禪
千古不磨深綠色　任地朱紫互爭妍。

僧徒能摘葉而供于佛前不知其故

萩

豈忍秋風吹細腰　丰姿婉孌欲魂消
多情莫是祗王後　暮々朝々舞袖飄。

高麗萩首夏花開

白楊

未雨何聲作雨聲　午風吹夢綠陰清
才疎志大君休笑　不使草苔樹下生。
自楊樹下雜草不生

題盤上山水　余戲拾庭上砂石、峙石摸山撒砂擬河、點綴草苔干其間、盤上一幅山水圖成矣即戲題

逝東江落碧成灣　虎石龍巖是北山
曠野西望杳無際　南風載鶴白雲還。

枸杞

可以飯兮可以羹　春芽秋實趁年榮
坡翁逝後亦誰在　恨殺今人不識名。
蘇東坡作杞菊賦

苾

底心設去水雲鄉　青笠綠蓑挂草堂

讀易捲來將啜茗　玻璃簾外最多涼。

葡萄

百年老幹似龍蟠　翠蓋掩天夏日寒
更有纍々千顆玉　甘酸不許俗人飡。

酸漿

世味復何說苦辛　去華就實保吾眞
儆君勿觸佳娘手　嬌舌喃々惱殺人。

姬孔雀草

春花秋實本尋常　我愛一年夏日長
驟雨乍過涼洗硯　筆端驀地畫鵷鳳。
花實似筆

辨慶艸　一名血留草

海內何時歸靖平　弟兄相食若爲情



儘教流血慘漂杵　永使後人淚暗傾。

西洋葵　六月念一日花始開、其色緋

熱時熱殺箇中機　敷道紅塵計却非
禮佛崇神那用問　庶從天日一其歸。

朝顏　各雲曙六月念二花始開其色青紅

名詮果作百花魁　要我蚤朝文字才
茅店鷄鳴人未起　何來曙色七分開。

敦盛草　成謂庭石菖

青衫浥露玉簪幽　簾掩嬝娜不勝樓
憶昔須磨明月夕　袖中裏笛幾回頭。

絹糸草

鳧頸詎關鶴脛長　生々有則命無彊
宛如織女鍼穿綫　繅作天河萬斛凉。

撫子　六月念四花始開

蓁葉猗々根有源　花留胡蝶任風翻
龕燈影淡香將絕　莫是先人不死魂
六月廿五日即我先考二十七回忌日也其前夜設壇焚香供以此花、句故及

朝顏　其二　六月廿七日花開、鮮咲、其色白

落々曉天星斗殘　雄姿颯爽髮衝冠
拂鞘白刃鋩如水　鎧袖斬風六月寒。

朝顏　其三　淡紫色而心白、名東雲

蚤起應知百病醫　露華如玉浸涼肌
紫雲忽裂山濃淡　正是東天日出時。

同　其四　名式部其色紫而心白

瞼邊帶露更嬋娟　曉向鏡臺還可憐

願借他時才媛筆　欲描閨怨兩三篇。

同（其五 淡紅色有五瓣、小辨抽出、名多寶塔）

冥濛天地幾時開　多寶塔前曙色催
應在如來金粟坐　五光直射讀書臺。

金魚草

香清茶熟晝蕭寥　意烏心猿取次消
細葉漣漪風度處　錦鱗追夢入逍遙。

孔雀草

葉如孔雀拽綾衣　花似蹁躚蝴蝶飛
薄倖佳人何有限　微風細雨映書幃。

同　疊韵

等閑底事脫天衣　謫落人間飛不飛
尙有餘情長末盡　覽裳一曲舞紗幃。

鳳仙花

實釵玉鈿有誰憐　忍說一身承寵年
長恨纔留童女爪　鳳凰臺上夢空牽。

朝鮮婦女以鳳仙花能染爪

送阿部無佛歸東次留別韵　七月二日

一笑振衣去不疑　驛頭群衆惜行時
亦應白晝提燈步　社鼠城狐儘聘馳。

朝顏（其六 淡紅而心白、名夕日影、至晚花不萎）

淫霖三日雨闌干　客不自來心却寬
還喜黃昏花未萎　夕陽猶作曉陽觀。

同（其七 赤、名日之出、連日風雨　七月十一日花開、其色）

飄風驟雨任呼號　柔弱持身氣却豪



昨夜半天星隱顯　今朝喜見日輪高。

同（其八 東天紅　同上　其色紅名）

賞花要解養花難　于雨于風心未安
喜鵲報晴人倏起　東天紅日露團團。

同（其九 藤色、莖短花大、或謂紫宸殿　七月十二日開）

朝聞夕死亦天恩　壽夭一如豈敢論
九葉相和高半尺　焉知花大別開門。

三色菫

蝶舞蜂迷孰是花　天眞流露思無邪
還君勿二三其德　濮上聲々不耐譁。

朝顏（其十 海老茶色、似圓十郎而葉少異）

空是色兮色是空　旣空即識變無窮

朝開暮落於吾足　雖有始鮮克有終。

同（其十一 圓十郎其色似橡栗）

骨相致和儼有光　轉心機處自成章
若將色性評花品　擬得梨園團十郎。

同（其十二 純白而心少帶淡紅）

遠逃山奧掩柴扉　强拭臙脂着素衣
尙有花顏紅未褪　夢魂時向錦屏飛。

同（其十三 薄紅有紫條名山家娘）

西隣有女玉無瑕　養在深閨感物華
閑却天生佳麗質　故施脂粉傚東家。

同（其十四 內赤外白名白章旗　十六日花開）

曙光赫怒欲燒天　瞻仰心胸自豁然

聞說廟堂議漸決　旭旂高颺朔方邊。
此二閣議決西比利亞出兵之詳報至

同　其十五　猩々紅

從心所適未求工　得失只當問塞翁
疑是楊村思孝客　一生愛酒醉顏紅。

同　其十六　純白

莫是香爐峰上雪　天生才色何雙絕
但應日午揭簾看　冷艷忽消三伏熱。

同　其十七　淺黃色、亂咲而花大

雨歇風收日有光　青衣藍袴意悠揚
夏雲看去奇峰出　窓外蟬聲午睡長。

同　其十八

苟日々新又日新　曉風朝露不承塵
物皆有訓君看取　爲寄牽牛花一輪。

同　其十九　菊咲其色濃紫淡紅、七福葉名晴虹

敢論人智與天工　花色葉形極不窮
北雨南晴山遠近　半空如水架霓虹。

西洋葵　其二十　複辨色紅而白

生長深殿極榮華　翡翠珊瑚任手加
底事半宵以身脫　降歸嫁在野人家。

朝顏　其二十　梅咲其色濃青或謂茶臺咲

琉璃一碧水涵天　悄立巖頭石佛前
却恠青春空悶絕　幾回額手臨深淵。

同　其廿一　太西洋

對花却懶獨傾觴　懷美人兮天一方



白日無光何處是　烟雲深鎖太西洋。

同　其廿二　牡丹咲、花大、其色淡紅

瓜期正熟欲何歸　才貌超群知者稀
爲誦三章桃夭賦　深窓追夢製婚衣。

同　其廿三　色白含微紅、葉大而蔓伸

千羊不及一狐裘　意氣元龍百尺樓
絕靡衣冠羈手足　寄身天地儘優遊。

同　其廿四　紫無地、花大

穠艷凝妝欲魅人　誰家麗女是前身
疎簾半捲花含笑　午榻無端夢太眞。

同　其廿五　紅色濃淡浸染成紋

顯晦亦應待自然　百年批判惟依天
暗中誰碎卞和璞　一道光明照後先。

同　其廿六　牡丹咲其色淡墨

清者浮兮濁者沈　泰初無有宜難尋
但觀神氣空間動　縹緲始知天地心

同　其廿七　鷄血色、花大五寸

奏凱戰袍血未乾　謝恩闕下似跨鞍
家人相顧皆瞠目　謬被小童認牡丹。

飛燕草

誰留玄鳥宿花回　紫白黃紅任手裁
最愛火雲漲空日　微風細々趁涼開。

紫陽花　鮮人稱繡鞠又俗呼七變化

繡毬影落曲欄干　支本相和打作丸
縱有七情時現色　此家圓滿此身安。

衝羽根草 一名延齡草

飜弄幸逃阿嬌手　寄身陋巷陪僊友
笑他炎帝如予何　剪紫裁紅花作藪。

車百合

蔓草徑荒誰駐車　形輪相對自成叉
半庭贏得山林氣　野趣橫生百合花。

玉簪花 往年家童自北漠山採取而植之

笄總簪纓璨放光　搢紳正笏意軒昂
栖遲尙帶山中色　水石居然領晚凉。

西洋夕顏 黃昏花開、其色純白、香强花大

浴後把盃嚬鼻褌　微凉打水欲黃昏
幽香脉々知何處　是不梅精即月魂。

朝顏 其廿八 富士峰、色白花大、牡丹咲

白毫光放玉芙蓉　定是雪山第一宗
清淨當知無上道　依稀東海最高峰。

同 其廿九 紅色佩咲

玉髻蘸紅顏色明　薔薇爲妹石榴兄
等閒勿贈閨中婦　鏡裏却招相嫉情。

同 其三十 桔梗咲、龍爪葉

懷抱豈敢許窺窬　奇變未嘗守舊株
滄海濤高風怒夕　群龍似躍叅明珠。

同 其卅一

處居宜屈亦宜伸　流露未曾失性眞
誰謂牽牛花短命　一年兩半每朝新。

同 其卅二

古書滿架酒浮盤　未說九旬銷夏難



還喜蕣花相映發　爛漫園我笑中看。
每朝配列數十杯於書齋而喫茶作例

同 其三十三

淑質雍容麗而端　清晨相對百憂寬
鄭詩妄擬孟姜美　謬作槿花一樣看。

同 其三十四

一花一詠竟如何　腹笥竭來空頂摩
秋菊謾誇千百種　未知變化孰尤多。

次川端不絕見示韻四首
率賦却寄

登高也見客愁吹　容易歲華夢裏移
明月山間秋正好　想君微醉撚髭時。
不絕在平南順川鐵山

龍住鳳棲翠成巒　城巖秋淨碧漫々
此中應在綀丹客　暮靄朝嵐一榻安。
龍住山在順川郡東十里鳳棲山在西十里城巖津在東七里云故及

蜨魂當向玉樓飛　秋至尙憐舊布衣
那使倖兒擅吐霓　五湖風月待君歸。
不絕經營鐵山成績太好云

夙斷功名念　讀書身未閑　日聞鹽米貴
但悞債成山　代東自述　以上四首九月七日作

菊

牽牛花謝菊花開　笑我生涯多事哉
培養未嘗論巧拙　短長各露性眞來。

同 其二

黃者如金白者銀　紛々正副色無因
知音最獲陶徵士　早種晚開特絕倫。

同　其三

種菊人非愛菊人　牽强花譜未傳神
九泉願起蘇坡老　焚古今書更一新。

朝鮮新聞特設御國自慢欄、連日載靑森縣人、雖關余則不多述、中有貸金而送餘生之語、極爲噴飯、即戲構三首、以寄示于執筆者

閱來二十八秋春　我亦不知矧世人
事業功名今似夢　覆天載地太平民。
敢謂本來色即空　世途未以說窮通
憑君幸免江湖哂　貧叟被還擬福翁。
銜杯嘯傲迹何尋　惟有宮兒占麴林
試與家人評酒價　己藏腹笥五千金。

記中以宮館君爲酒豪、故及。以上十一月念七卒賦

先生詩、隨年編次、雋思雲遂、麗詞霞舉、間交慷慨悲壯之作、其閱歷起臥之狀、委曲溢行間、余感誦不措、借覽之久、將一年、所益極多、先生勿咎返還之遲延、

松田　甲　拜言

故人は嘗て既掲の詩稿を松田甲氏に送つて閲讀を乞ふた。右に掲げたのは同氏の評言である。



# 歸臥詩稿

歸鄉偶成、次從兄大木見示之韻

外遊卅載始還鄉　相顧村童異我行
事業消長濛似霧　功名起伏惚如霜
負山抱海堪携杖　啼鳥躍魚足舉觴
但爲近親皆去世　悵然空對大悲堂。

疊韻、示大木

老餘至樂在歸鄉　景物依稀歷作行
脩竹繞庭凉夏日　巨杉壓屋凜秋霜
儒書佛典同充架　海菜山肴交伴觴
時有吾兄來話舊　縱談橫說氣堂々。

安東挈雲次韻見寄疊韻以謝　八月念五

雅什寄來感溢胸　午眠忽地夢曾蹤
故鄉尙有他鄉想　盡日無爲擬羲農。

九月十九日訪大木於大間村、歸途遇雨

纔登急阪野蹊平　忽見滄溟萬里晴
暫駐孤筇西聘望　無端憶起外征情。

予七月自朝鮮還

蜻蛉追暖自由遊　風爽穰々黃稻秋
遙聽午鷄村已近　故人家在古橋頭。
敲戶主翁倒屐迎　爐邊啜茗賀和平
閑遊半日俱忘老　談涉東西仔細評。

少婦慇懃薦午餐　笑言粟飯下喉難
喫來一椀兼三椀　知是味香勝玉盤。

古木成行境最閑　玉流遶屋水潺湲
處居何用論都鄙　要在從容自得間。

雲惡歸程雨捲風　果然猫眼似秋空
試令名手描光景　困客點睛畫幅中。
但言猫瞳與秋空

悼今大路觀粱之死　十月四日

病入膏肓知不治　我身今死奈斯兒
人生說到君心境　慘雨悲風弗耐辭。
遺兒僅十歲云

壬戌秋夕　十月五日

久在異鄉事遠遊　歸來初遇故園秋
月明如古人皆沒　今夜那堪獨上樓。

偶成　十月十九日

詰貓時覬隙　寢食異孤居　世變徵新紙
物情稽古書　夜風多落實　朝雨少游魚
日作無言行　壽康地有餘。
椿子樫實每朝滿掌、游魚即池中鯉

夜半口占　十九日

節入晚秋月失明　狂風淫雨太無情
半宵催尿眠初覺　唯聽怒濤拍岸聲。

大木贈壺酒及鮑魚以詩代謝　十月二十三日

莫以物論聊表情　餽來銘酒與珍羹
燈前獨對盃盤坐　雙淚頻先雙箸傾。
鮑魚屬禁漁

政變推移未足驚　紛々輕薄世間情



歸來却受蘇生僥　今昔知音惟在卿。

獨坐無人電燭靑　一盃一箸不須停
醉來更引當年恨　起酹竹園未死靈。
此日恰當于亡兄竹園之忌日、竹園與大木最親

感想如泉撤膳遲　爐頭火滅覺時移
賴君今夜偏排悶　直抒眞情代謝詞。

聞深浦築港議略決遙賀　十月廿八日

懸案多年玆告成　諸君努力在惟誠
海堤新就波鷗穩　船舶望風共市榮。

遙懷島川翁戲作　同上

應達宿望叫快哉　予看報紙獨重盃
臨行稍有不安念　得意憶君滿面來。

謝藤田某見贈灘酒　十月三十日

平生嗜飲夙親灘　近得金弦醫舌乾
多謝今宵白鹿贈　欣然邀友似相看。
金弦大山酒之上乘者也白鹿又酒名

戲題酒　同上

酒到堺灘獨擅場　大山雖美乏餘芳
色香味備須論飲　擾々地醺未値嘗。

雜興

節物追時迫　故人竟叵招　烏飛黃柿墜
鯉躍赤楓飄　水月夜冲澹　林風晝寂寥
一生今似夢　閒坐誦逍遙。

其二

電燈辛照席　遵例獨銜盃　烏宿知風歇
蛙鳴察雨催　人間生若死　天地闔還開

徐入微醺境　衰蠅掠耳來。

十三夜　十一月一日

消燈兼復欲消愁　窓外分明白晝侔
知是十三夜間月　清光滿地勝中秋。

即事

池水清於玉　鯉魚指可樓　丹楓燃似火
翠柏潤如油　奇鳥穿枝囀　妖墓傍石休
慾求何有限　閒適自悠々。

對柿　十一月廿二日

對柿追懷卯角時　挾竿快捷巧攀枝
歸來身老眼無力　試借剃刀剝蹬皮。
屋後有柿樹數株、每秋採其實而製串柿成例、予幼時最樂、今亦有此事。剝皮必用剃刀

對梯肅然獨斂襟　家翁時示剃刀箴
揮之咄汝曾成闘　耳底迄今猶有音。
予幼時與叔兄爭、揮剃刀而脅之、翁大怒而奪刀、深藏此於篋底、每年之剝柿即出而示之、予伏目而無言

剃刀幾挺滿遺篋　把握相爭手指忙
故避古金操新鑄　及邊恐有少年創。

對柿人生最可憐　繁枝已見客遊前
秋來結實今猶古　地下先君三十年。
家嚴去世既三十一年

對柿最深懷舊情　團欒毀指賭輸贏
即今底事無人訪　只聽夜間風雨聲。
往時剃柿、隣人來集、頗極嘻戲、今無此事

朝　十一月念三、以下三首成

曉鴉啼喔々　早起不差晨　筧水徐濡髮



桁衣細拂塵　瀹茶先薦佛　歡粥少凝神
門外惟千里　有時一欠伸。
朝飧多用粥

晝

郵丁投報紙　夐勝得嘉魚　國命迺仍塞
人情卷又舒　靜觀三界外　默想兩儀初
故舊屢傳信　欣然認答書。

晚

暮鴉三雨點　林密易黃昏　多謝杯中賜
可忘瓶裏恩　詩篇無窘束　文字自雄渾
但厭俗人到　擁衾護醉魂。

十一月廿六日夜、夢與亡兄逢、款語久之、話中偶及幽界之事、夢一覺而皆失之、但模索其一二於暗中、遂成詩三首、以充于他日笑話之料云爾

夢會亡兄語最親　餘音在耳竟忘眞
但無壇上位牌設　縱作室家不現身。

得聞淨界覺皆空　微記生々穢土同
老少復無男女別　雜然裸裼一堂中。

平等也無劃自佗　團欒歡喜不知痾
贈遺或見互通款　得意說人供養多。

同夜、夢又與亡友遇

冥途相遇共徘徊　力役了程賜暇來
行到河邊翻影去　舟橫橋下水煙開。

近來動見冒不眠症、徹宵不成一睡、廿二日夜然、二十五日夜又然、而廿七日夜亦復如是亦知今夜就眠難　偏怕神經日老殘

百計竭來終使酒　頻々促尿不禁寒。
不眠恐爲茶之所妨戲作
酒足誘眠茶却妨　只應飲食戒過量
出遊殺醉非能事　早寢尤宜雪夜長。
十一月三十日恰當于甥觀海七回忌辰不禁追懷
稟生長子學兼才　早折如君最可哀
幽鬱十年甘病苦　氷心一片護寒梅。
君逝風霜僅七年　四棺新瘞墓標連
龕燈香火晝蕭寂　遺愛草花亦悄然。
君所曾植之洎芙蓉今尙着花予證之于几側而獨翫之
十二月三日夜又不成睡
又見茶魔妨睡眠　自嗤妄執攪丹田
餘居尤解人間味　兀坐吹煙欲曉天。
五日大木來見似初冬偶成二首乃次其韵即與二三首成矣
雪霜滿地最多風　凋落影寒池畔楓
却笑山中時序速　僅過旬二歲將終。
夏逼南風冬北風　春芽秋落水邊楓
直看脚下須三省　雖有始能鮮有終。
積雪封庭早送秋　天寒容易歲華流
櫓聲撼海風波激　知是雷魚上網舟。
鍊膽是冬詩則秋　疾風捲雪沒溪流
自憐衰耗怯寒甚　聞有遠洋鈎鱈舟。
偶成　十二月八日
雨雪日相續　連旬不見晴　奔飈車馬絕



層浪鰐鯨驚　漁戶甘徒食　商家苦自營
同承天地化　禍福異枯榮。
海濤　九日
距海十餘步　負山自作城　倒瀾岩出沒
回雪岸縱橫　絕莫喧騷響　唯聞澎湃聲
一朝風忽歇　浩蕩與天平。
山風　十日
疾風吹自北　猛獸似相爭　流逆魚潛影
枝摧鳥不鳴　頑童多失色　走卒總呑聲
光景何凄絕　頻令孤客驚。
鴉　十一日
塗墨飛成隊　孰與是雌雄　啞々催晚景
喔々報晨空　枯木留禪臭　荒墳贊佛功
耳馴聞不厭　聲律日相通。
水音
筧水無間斷　淙々注曲池　妨眠宵未惡
和夢曉尤宜　青羽濡騰沫　紅鱗弄細漪
焉知山雨到　萬瀑勢難支。
即興　十三日
昨日看飛雪　今朝雨又風　蟠松庭上白
潛鯉水中紅　天候無常度　物形多變通
縱非遷謫客　自作閉門翁。
次大木六十四誕辰自祝詩韵
陳賀　十八日
大木凌群樹　欝蒼盤曲枝　梅妻斜倚蔭
籜子列成籬　己閱明治世　更逢大正時
朝封寧作累　野隱自忘悲　元氣先春動
老軀迎臘支　祝君超六甲　今是四齡兒。

昨夜漁獲鳥賊者頗多　廿三日

魚族得時趁汐流　才因惡浪免誅求
風收漁叟乘機敏　海上多鉤烏賊舟。

## 癸亥集

癸亥元朝

東方催曙色　日上笠形山　雲霧連峰頂
浪輝群嶼間　竹叢殘雪白　池畔薄氷斑
讙笑齊相賀　渾忘去歲艱。

同　示人

元朝新萬象　曉日燿韶光　山帶祥雲聳
河縫瑞雪長　奮身須努力　振氣要開張
築港工將起　爲君重侑觴。

設言

也遵吉例迓新春　開口無心戲欠伸
生死已離煩惱苦　尙斟椒酒喜酬賓。

二日夜所見　陰曆十一月十六日

家人伏寢夜深更　窓外只看普月明
雪白松蒼眞淨絕　疑吾恍在廣寒城。

三日口占　此日頒布觀音守護札於村內各戶、余幼時每從事之

歲回憶昔少年吾　蹴雪奔馳頒護符
自笑歸來自己老　閒窓隱几眺街衢。

寄錦石　東奧日報募集俳句中、錦石之撰句見抽地位、錦石八木翁之令息云

炭竈烟濃春復秋　山中渾忘世間遊
賴君道破人生訣　事業當持此骨頭。



清淨院六回忌日書懷　十日

心鏡絕無片翳纏　厚施及衆德聲全
餘音今日依誰述　合掌獻茶哭佛前。

訃報猶新己六年　歸來寂寞有誰憐
一生無恙還應慰　天壽得時了世緣。

夙憾米齡後一年　子孫環坐未開筵
遺蹤且喜生家上　阿姉七旬皆健全。

眼看家運與年遷　追往思來轉黯然
興廢在人人在德　勿敎柱礎水中顚。

偶聞紙鳶聲　同

有紙鳶聲颺者誰　忽焉敎我憶童時
操縱巧趁行雲舞　盡賴母親手裏絲。

## 故人と花

追憶の辿り行くに委せて、筆を進るならば、寔に一卷の書を成すであらう。しかし、今は、特に詩人としての故人の面影を偲びつゝ、餘白の埋草として行くに止めやう。

（菠部生）

故人が如何に花を愛したか、それは四十頁から五十二頁に亘る數々の花を讃へた詩を讀んでも解るであらう。

花は何花であらうとも、夫々の花にその美點を見出して、懇ろに培養し愛翫した故人は、眞に詩人であつた。

殊に故人は朝顏の種類多くを培養して樂しむだ。鉢が足りなくなると、罐詰の空罐、穴の明いた儘に迄植えた。（七十二頁へ續く）

# 卜居餘滴

四月十一日發故鄉深浦而出京
卜居于北豐島郡長崎村、即事
二首　四月念六

居卜洛西豐島邊　邑名長崎也奇緣
枕頭未滅卅年夢　尙向傍人話內鮮。
余在鮮三十餘年、昨夏以事歸臥于故山、今亦移京、豐島長崎之名與朝鮮有緣

敢傚谷鶯企喬遷　窮通繫在不言天
醉生恐受人間訾　誰信老來學謫仙。

挿櫻花　二十八日

寂寞老櫻後圃東　一枝乞得挿瓶中
春窓始動生々色　才遇詩人趣不同。

散步所見　五月一日

屋後逍遙任足行　榮波麥浪一望平
長隄已見電車駛　縱不買人首暫傾。

雨日偶成　三日

春雨霏々至　境幽別作寰　野羹和口舌
村酒上眉顏　點鼠窺厨走　巧蛛潛隙間
也無明日計　夢拾落花還。

其二

細雨敎人倦　嘗乎學宰予　行窮悠久地
忽失刹那居　大小無差別　方圓復一如
茶烹眠正覺　簷滴自成渠。



躑躅三株花盛開
蟲日妻投十五錢而購植云　六日

花開燃似火　不用遠勞形　追暖留胡蝶
怯寒宿蜻蛉　幸逃喧鬧地　特隱靜閒庭
市價君休問　恐汚躑躅靈。

偶成

得雨幽人且浩歌　看雲獨坐暗愁多
二三有度百千萬　生死無梯壯老痾
勢走利奔梁上鼠　左同右附火中蛾
總無主我惟誠信　奈此斷魔寶劒何。

同　六月三日

去年今夜發京城　一路含愁受送迎
龍樹依稀護堂宇　龕燈髣髴照墳塋
子孫偏懼墮遺業　遠邇已聞渝舊盟
歸計雖違深未憾　江湖却覺笠蓑輕。
境內有巨杉、名龍燈木

口占　七日

也無軒冕累名聞　野草山禽自作群
頭宿蜻蛉疑結髮　衿留蛺蝶似垂勳
螳螂尺蠖新紳士　垤蟻壁蛛古將軍
情意却通言語外　纔逢利害世紛々。

偶成　十七日

聞香讀書不容邪　屏迹郊村避市譁
寤寐有餘閑活計　扶持無後淡生涯
藏書千卷留鄉里　游屐卅年關國家
俯仰自甘天地咎　殘軀但怖酒錢加。

同　二十二日

陰雨彌朞月　時令所使然　口厨儲菜果

腹笥遠腥羶　東壁蝸揮篆　後庭蛙弄絃
睡蓮呼不起　一炷漲香煙。

六月二十三日

高低分氣壓　豪雨伴風過　深碧雲如拭
淺青水似磨　前街人絡繹　後圃月婆娑
天候未量得　明朝知若何。

同　此日工藤兄夫婦相携來問賦似

焚香兼掃地　友自遠方來　不慍眞君子
無慙豈棄材　寒暄唯一語　徵逐幾乾盃
同脫風雲會　知被野鶴猜。

午睡　七月四日

午睡一時或半時　日爲恆例雨尤宜
心頭冷却維摩喝　脚下熱來扁鵲治
似拾遺珠頻握掌　如迷岐路數支頤
虛拘榮養身無益　要在容與不自欺。

戲作　同

後世恐生獸性人　攝生相競說鑑泯
勿追未葉忘根本　秖養肉身不養神

十九日　梅雨初霽

久雨初晴屐齒黏　庭階日午漲蒸炎
桔槔響處嬌聲湧　團扇搖邊喜色添
草左右飄風似獸　星三兩點月如鎌
豈思焦熱人間迫　强拂群蚊遲卷簾。

七月二十二日奥田兄來問同飲

相見先相笑　俱成白髮翁　衆兒眞謂富
寡病敢言窮　話柄無經意　談材不用工
感君交誼厚　與少壯時同。

讀春秋四十年戲寄著者

十歲神童廿秀才　纔過而立也凡材
春秋冊史今如此　突兀期君知命臺。

次不絕悼芙蓉韵却寄　八月一日

死本可哀生可憐　一焚玉石總成煙
冢頭願借君才筆　描出舊朋幾十編。

憎蚊

以文从虫讀云蚊　但襲夜陰晝作羣
宛似新人縱性慾　啾聲飢血一紛々。

一切經刊行會、募豫約會員、余亦應之、即賦

也靡物情妨視聽　悠々寢食與心寧
老來聊節平生酒　換得大藏一切經。

八月十八日　拂曉微雨忽霽

降雨不論少　朝雲日蔽光　久疲三伏熱
初得一簾涼　午睡拋書速　晚餐衙盞長
甦生何限我　知副萬人望。

八月廿二日午後得雨　聞電力發源池水涸云

雲雷響度似鳴鑾　膏雨霈然盈作湍
今日若微天上賚　下民終夜得明難。

八月廿五日

黎明眠恒覺　起覩蕣花開　紅紫尋常色
畸狂異數材　含風涼自滿　啜茗句先催
暑伴不渝約　年々棲處栽。

九月二日

物窮生變莫相疑　火祲震災眞可悲

叫喚滿都誰忍聽　半爲焦土半爲屍。

有二日夜强震再來之報、幸而不至

蟲潛風死肅無聲　夜自三更坐四更
微動尙疑强震至　自嘲理智沒平生。

變災雜詩

禍生叵測有誰扶　冊萬死傷瘞九衢
昨日繁華今燋土　昊天憾不拯無辜
應鑑前車樹後圖　綿々何爲嘆窮途
一身赤裸須呼快　天捲風雲起匹夫。

十五日

易俗移風世所難　一朝震怒使人寒
舌雄屑々何顏色　潤眼須居高處看。

十七日

處安婪慾儘亡身　臨險却憫賴佛神



災禍幸維生命足　此時財寶棄如塵。

二十三日

才過喉頭熱已涼　苟安日恐陷荒亡
經綸盡速匡其本　莫使人心弛緊張。

辛免震災忽火難　仰天却怨得生殘
無衣無食將安住　剩有狂風暴雨寒。

二十四日夜暴風雨代罹災者而書懷

神悲鬼哭一時休　大道無門任自求
昨夜慘風悽雨後　天令明月照中秋。

二十五日此日古仲秋明月翳天

修羅未必限于戈　慘見屍山又血河
廢屋潰堤三十里　仰尋明月感如何。

二十六日

送朝顏草　二十九日

曉風朝露冷髭邊　猶着殘花强粧妍
謝爾幸銷三伏暑　復藏種子約明年。

十月一日

一日即知一月初　瞿然宜亦鑑前車
家居隨分各修業　心正安危力有餘。
話到震災思慄然　怪雲倒勃欲崩天
以身避急今如夢　慘景猶浮眼底鮮。
綱常拂世亂離披　地異天災咎屬誰
猛省須徵安政事　人心正是革新時。

右一首二日作　安政之大地震寮以此日而起云

二日　午前微震三至

人心稍見復常情　震動三至又不驚
緩急最憂多失度　勿忘鍛鍊在平生。

三日夜一時强震又至　報辰計停振于

兩默風沈夜氣更　礮然地震膽還驚
餘威無底知何孽　未使鬼神感至誠。

四日

兆民不孰泣慈仁　皇后儲宮親閱巡
盛德歷朝曠千古　仰瞻大正命維新。

是日攝政殿下親巡視罹災地、今者皇后陛下親臨于各病院而慰撫傷病者云

一使人心覆水回　喜迎鸞背負山來
俄邦獨國行將極　皇運億年從此開。

八月　長崎青年團員者來日、欲乞得不用故衣以救恤罹災者云

物皆有度莫相超　過不及知是一調
官恤如岡宜早給　私恩恐遺懶民饒。

十日 次不絕見寄之韵却寄

慄然不誰慴天工　震怒一朝萬有空
欲問帝都文化跡　悽烟迷漠廢墟中。
孽從享樂極邊來　天示猛威眼始開
冊萬犧牲誰忍語　尚贏餘命幸逃災。

十七日夜夢見人詰余

生無益世死無聞　矻々苦何老學文
童子問余々且默　起觀殘月與浮雲。

同夜見魅夢

己見人情慣異災　晚涼貪醉玉山隤
夜長忽覺忽還睡　幻想夢從天外來。

古十三夜 次不識庵詩韵

後中怀月上椽清　嚼栗啜茶坐夜更
欲語一年人事變　殘鴻遙向北邊征。

廿九日夜 庭上在陀利耶二株古須毛壽數根

醉後踞椽看夜花　露濡枝葉宿青蛙
神融豈有無情物　樹下蒼苔亦一家。

癸亥天長節

天子思民苦　宮中廢賀儀　聖恩何以答
萬古固皇基。

偶成

灾後補工取次忙　剩看晝短苦宵長
綿衣未就寒將至　殘月曉風己隕霜。

十一月一日

忽地氣溫齋變來　風柔日暖訝春回
民心猶未安餘震　還使杞人懷鬼胎。

二日

風激雨狂屋欲頹　電燈忽滅枕衾驚



直依算數占天候　昨夜象臺設報晴。
雨歇狂飈不少衰　喊聲捲地勢無遺
可憐紅白花紛亂　得意秋光難再期。

三日 用不絕見示天長節奉祝之韵

此日年々捧壽觴　仰瞻中外國光揚
豈圖悲報從天到　忽聽哭聲俯地長
寓道季歌垂後統　寄情秋菊慕餘芳
帝都興復須相勵　勿使威靈嘆望洋。

次芙蓉忌辰作却寄不絕

無愁也易感秋風　想見濕雲漲院中
挽什彖披遺稿讀　香烟髣髴影濛々。

次大木見示新居即事韵却寄示 十四日

邸就非成日　積年因有爲　揭簾看霽雪
踞石濯清池　星散梅花屋　菊殘明月籬
四時多興趣　嘯詠老無涯。

其二

新第竣工了　遙和話苦營　欲伸身要屈
有志事終成　門對林泉邃　窓容風月清
非唯與祖業　永享子孫榮。

十七日大高君父子來訪記喜

空谷跫音度　豈圖親友來　先聞鄉士候
且語市門災　君僕忘辭讓　傳酬略酌媒
壯時多奠說　只悸故創開。

我俗親友間多以君僕相呼稱

二十日遊哲學堂即事

擬摸水石闢心衰　辛苦築威哲學關
物宇園荒秋閒寂　幽靈祠畔暮雲還。

廿二日夜 陰曆十四日 所見

亦無嫖客上旗亭　霧罩樓臺燈影青
風冷十分秋已滿　一輪明月兩三星。

一輪明月兩三星　搖落夜寒處々亭
活動館前行客絕　模糊隔霧點燈青。

模糊隔霧點燈青　明日唯看控衆星
却後人心能愼否　亦無嫖客上旗亭。

同夜酒檐着

門前偶遇搬夫過　知是輸來酒一荷
勿謂夜間無下物　直燒昆布酌金鵝。
喜與昆布國訓稍似

念七日明石君提薯蕷一籠而來問

倒屐邀嘉客　餽吾諸一包　至情憐老友
慵性愧貧交　尙有賢人酒　但無長者肴
歸程留不得　何日復來敲。

十二月一日

災後蒼皇己九旬　纔過一月歲將新
賜金今日天恩渥　諸老何顏對市民。
此日頃與恩賜金於罹災民云

復舊復興談已陳　百年秪合盛經綸
噬臍不及機難再　未必汙隆劃市民。

曉起

曉霜鋪草月西殘　浚井水溫口可餐
却憶去年在鄉土　朔風吹雪不禁寒。

二日

凍雲壓地冷書燈　果見今朝結薄氷



寒氣逼身暮年近　人心只恐日兢々。
日曜日期問客來　家人烹鼎理鹽梅
庖俎多是舊交贈　市販不須索貴材。
此日炊栗飯

三日

地結氷霜久不融　可憐冬季怯寒翁
葉凋庭草慘無色　惟見晚楓凝淺紅。

初見新葉書

短窄偏疑新葉書　悉敎私製屬空虛
上欄作限徒勞耳　改恐只知事利漁。

早寢

戛々觸門非客推　夜風捲地逞奔馳
明朝偏怯寒威甚　早入寢床結夢遲。

四日朝

殘月如鎌懸在南　曉空澄度訝拖藍
林煙未起橋霜白　納豆聲々寒不堪。

爲替劵至錢局遙輸換劵雜

百金雖寡足迎新　孤德敢誇必有鄰。

戲作

家乏餘財未患貧　救寒止渴老逾新
若將幸福論衣食　亦是箇中第一人。

五日夜所見

憶昔潯陽江上婦　哀調使客愁停酒
放縱今見紊風徒　夜抱洋琴漫弄口。

六日賦新年言志三首

甲子方頒曆　回顧應改年　讀書存隻眼

作業擔双肩　永體君臣義　恆懷内外緣
春風吹野客　心與老梅妍。

其二

年頭述志要書紳　矧亦復與災後春
直視是非分黑白　莫拘利害錯疎親
無窮皇統傳明主　有限餘生伍逸民
記取艱難能玉汝　老來偏愧賴他人。

其三

歲革共期新此生　天降災孽試權衡
約衣減食尋常耳　邁進秖當致至誠。

夜七日　渡部生來貽當用日記
此日受年末賞與云

勤酒賀君贏賞歸　一年勤苦未全非
嘉貽且謝歲時抄　或恐健忘紀實微。

九月朝起　左手足無力半身不自由

左脚難支起欲顛　半身鈍重似繩纏
預期莫是中風症　未到强情斷酒緣。

次蓄堂新居韵寄呈

纔得詩人境自閒　沈唫隱几笑看山
焉知筆下起雲雨　震撼乾坤生此間。

（六十一頁の續き）　蓋し一は儉約、一は一旦萠え出た苗を捨て去るに忍びない愛情からであつた。花時になつて代る〻る澤山の花が見られるのもその理由の一つであつたに違ひない。しかし、兎に角、空鑵であれ、破れ鍋であれ、鉢植同樣の偏りなき一樣の愛情を以つて恂はり育て別に大してその不體裁を氣にもせず、只管に花を樂しむだのは、故人が世上の所謂風流人とは餘程種類を異にして、

（七十四頁へ續く）



# 野隱詩稿

## 甲子集

新年雜咏

野隱無常守　等閒過二旬　一家持儉約
三口保和親　晩菊終支臘　早梅先占春
有肴還有酒　客至不憂貧。

其二

不知經歲老　樂聖例甘貧　命也家無後
庶幾居有鄰　賀牋該貴賤　壽席雜疎親
治亂歸誰咎　勿忘天地瞋。

十三日正午、和田老夫婦伴愛

孫一枝孃來訪、即賦

門前聞剝啄　吐哺忽相邀　老鶴聯豐羽
鵷鸞垂彩翳　久蹤追夢結　離恨借盃消
何爲歸裝急　東西雲路遙。

一月念六、東宮慶典、謹賦

無限春風不盡吹　青宮此日行婚儀
騰々龍馬護皇子　肅々鸞車納淑姬
禮砲遙轟祭神際　謳歌齊起授盃時
野人獻飾聊稱壽　寶祚億年固洪基。

二月朔山口翁（太兵衛）來訪記喜

昨會和田老　今邀山口翁　久離雲斷續

遠別海西東　心契無深淺　面從多塞通
徹宵須痛飲　眼裏幾人雄。

二月十一日故工藤他山翁追贈
從五位欣然率賦　余就教於漢學

多年師事接高風　經術文章衆所崇
沒世不稱君子疾　聖恩今日感無窮。

三月一日即事

忽遇今朝三月初　一家無恙意安舒
楣間新挂玄齋書　壁上雙垂老石書
靜坐焚香薫几席　微吟搔雪掃庭除
剩看丁字花將發　自笑閑人事有餘。

此日少雪
自註玄齋沈師正之雅號、與謙齋恭齋並稱朝鮮三齋又老石大院君石坡翁之別號

丁子花

青衣支臘早魁春　姿色芳香與罕倫
若得梅花擬高士　好述丁子是佳人。

（七十二頁の續き）眞に花の魂を靈感し花の生命と同じく呼吸をした詩人であつたからである。

陳列所時代から身寵る迄、その間居を移す事五度、しかも故人の住む處には必ず朝顔がありその他の花があつた。殆んど庭のないやうな處に住むだ事もあつたが、そんな處でも、物干臺に五六十の朝顔を培養した。陳列所時代には二百鉢以上もあつたと記憶する。どこに居た時でも大低百鉢内外は作つたであらう。それ等を實にまめ〳〵しく手入したものであつた。雨が降ると、跳ね起きて提灯を點し、（九十九頁へ續く）



# 南征日記

# 東學黨視察日記

窮レハ則チ變ス天下ノ事物皆然ラサルハナシ若夫時到リ機熟セハ蟻穴モ尙且大堤ヲ決シ其勢遂ニ支フ可ラサルナリ陳吳呼一呼シテ秦國亂穢クニ亡ヲ以テスル所以ノモノ何ソ深ク怪ムニ足ンヤ顧レハ朝鮮ノ國タル致綱上ニ紊シ民心下ニ離レ積衰積亡ノ勢業ニ已ニ成ル宜哉道徒一タヒ義ヲ古阜地方ニ唱ルヤ朝野此カ爲ニ周章狼狽忽ニシテ淸兵來リ忽ニシテ日軍到ル機一タヒ動ケハ將ニ八道ノ山河ヲシテ硝煙彈雨ノ裏ニ沒了シ去ントス此時ニ當リ道從ノ一擧手一投足其關スル所至大至重道徒ノ動靜豈忽諸ニ付ス可ンヤ未タ知ラス目下道徒ノ雌伏スル所果シテ何レノ邊ソ忠淸道淸州報恩ノ地古來道徒衆シト聞ク此地一タヒ過テ更ニ全羅道ヲ縱斷セハ庶幾クハ道徒ノ消息ヲ窺悉スルニ足ン乎惟フニ雲山萬里ノ行豫メ覺悟セサルヘカラサルモノアリ旅費ノ缺乏、途上ノ疾病、意外ノ災厄、余友近藤君賢吉醫ヲ業トシ兼テ劍ヲ使フ山縣氏猪之助長ク藥局ニ在リ調劑ノ技ヲ得亦稍朝鮮語ヲ解ス余乃チ意中ヲ兩氏ニ語リテ强テ同行ヲ求ム兩氏快ク之ヲ諾ス主從僅ニ三人於是乎東學黨視察ノ行ヲ企ツ

明治廿七年七月初五日　拂曉藥籠ヲ馬ニ駄シ刀劍ヲ肩ニ荷ヒ三人相携テ漢城ヲ發ス送別者和田正修奈良崎八郎櫻庭經緯松前爲助ノ諸氏ナリキ十一時四十分果川縣ニ着ス果川ヲ去ル半里程清兵四人馬ニ騎テ來ル二名銃刀ヲ携フ想フニ傳令ノ爲メ牙山ヨリ京城ニ赴クモノナラン午後一時四十分果川ヲ發シ清溪、花洛山光明嵋ノ間ヲ過キ五時三十分水原府ニ着シ旅舍ニ投ス此日晴雨不定

初六日　朝六時卅分水原ヲ發シ午後二時三十分振威ニ着シ宋書房ノ宅ニ投宿ス水原ヲ去ル未タ幾程ナラス我騎兵六騎ニ邂逅ス昨七原ヨリ到ルト就テ清兵所在地ヲ問ヘハ曰ク天安ニ在リトノ說アレトモ未タ信スヘカラスト又曰ク清兵上京ノ消息得テ詳ナル能ハスト七原ト天安ト相距ル遠カラス而カモ此ヲ確メスシテ漫然歸途ニ就ク斥候タル任務ソレ焉クニカ在ル此日駄馬ノ雇フヘキナク未明ヨリ東奔西走シテ漸ク之ヲ得駄賃平日ニ三倍ス

初七日　清兵ノ徵發ニ依リ牛馬ノ雇フヘキモノナシ乃チ擔夫一名ヲ雇ヒ午前五時廿分振威ヲ發ス七原「ソーセー」ヲ過キ間道ヲ經テ稷山ノ左側ニ出テ更ニ擔夫一人ヲ加エ馬日峴ヲ越エ午後八時廿分木川ヲ去ル半里程ノ處ニ宿ス蓋此間道ヲ擇ヒタルハ一ハ清兵ノ會合ヲ避ケ一ハ里程ノ近キヲ求メタルニ由ル此日天熱シ路險ク擔夫進ム能ハス當日ノ艱想ヒ見ルヘシ馬日峴ハ昇降凡一里有餘峻崖險阪往々鼻ヲ摩シ肩ヲ壓ス危



懼言フヘカラス

初八日　擔夫二名ヲ雇ヒ午前四時五十分宿舍ヲ發シテ木川ニ抵ル韓人四圍ニ蝟集シ問フニ漢城騷亂ノ事ヲ以テス且始テ招討使ノ傳令酒幕壁上ニ貼示スルヲ見ル然モ問フニ道徒ノ消息ヲ以テスレハ皆得テ知ラスト爲ス近午滿天墨ヲ潑シテ雨暴カニ降ル雨ヲ冒シテ進ム雨勢愈々劇シ全身恰モ河ニ溺ルヽカ如ク泥中轉倒屢次尙勇ヲ鼓シ擔夫ヲ呵シ午後四時錦江ノ支流東津江ヲ渉リテ宿ス水深ク臍ニ及ハサル僅ニ三寸

初九日　雨少ク霽ル午前七時卅分宿舍ヲ發シ十一時三十分清州ニ着ス安着ノ報ヲ家人ニ致サント欲シテ電信局ニ至ル線斷テ果サス此行三人共ニ徒步シ時々藥ヲ嚙テ多少ノ益利ヲ得ルト雖モ途中人馬ノ賃銀日常ニ三倍セシカ爲メ囊中稍空乏ヲ告ク是ニ於テ余ハ政廳ニ赴キ吏員ニ迫リ漸ク銀貨五金ヲ交換スルヲ得タリ吏員酒餐ヲ饗シ待接頗ル丁寧ナリ蓋シ余カ文筆ヲ弄シ風月ヲ談セシニ由ルナルヘシ道徒ノ動靜ヲ探ル得テ知ルヘカラス只招討使ノ傳令到ル處ニ貼付スルヲ見ルノミ

初十日　始テ漸ク馬二頭ヲ雇ヒ午前七時清州ヲ發ス峻嶺險坂層々疊々應接ニ遑アラス午後六時報恩ニ着シ朴書房ノ宅ニ投ス此日偶マ馬ヲ雇ヒ路險惡ニシテ騎ル能ハス三人相顧ミテ失笑幾番

客年道徒此地ヨリ起リテ俗離山ニ據ルト云フ俗離山ハ此地ヲ去ル僅ニ三里偵察ノ坊

其宜キヲ得ハ或ハ道徒ノ消息ヲ探ルノ端アラン想フニ余等漢城ヨリ此地ニ到ルノ間專ラ藥商ヲ以テ名ヲナス若カス此ヨリ日本道士ト稱センニハ乃チ僞テ日本ノ道士タルヲ告ケ兼テ道術研鑽ノ爲メ諸國遍歷ノ旨ヲ語ル夜ニ入リ一韓人密ニ來リ告ルニ東學先生ノ居處ヲ以テス先生姓ハ朴名ハ元七字ハ世尹五南ニ住スト五南ハ報恩ヲ去ル僅ニ三里

十一日　午前十時導夫一名ヲ拉シ朴元七ヲ五南ニ訪フ至レハ壁墜チ窓壞レ主人既ニ去テ在ラス市民ニ就テ其去處ヲ問フ或ハ謂フ青山ニ去ルト未タ信ヲ措クニ足ラス青山ハ五南ヲ去ル二里乃チ失望ノ餘倉皇日清兵ノ來意ヲ書シ此ヲ道學諸氏ニ通センコトヲ托シテ歸ル此夜報恩ヲ去ル二里ノ處ニ道士黃河一ナルモノアルヲ聞ク又稍〻意ヲ强フセリ

十二日　午前七時余又導夫一名ヲ伴ヒ山ヲ越エテ黃河一ヲ訪フ家門閉チテ人ナシ市人ニ就キ其轉住所ヲ探ル到レハ主人亦出テ、在ラス而シテ其行ク所ヲ知ラスト家ニ在ルモノ壯夫五六人衣冠容體尋常農家ノ子弟ニアラサルニ似タリ乃チ腹立紛レ痛ク彼等ヲ罵倒シテ歸ル、導夫言フ此地邊人皆東學徒ナルモ曩ニ會マ全羅道ノ道徒ニ通セシモノ一日歸村セシカ逮捕令ノ嚴ナルカ爲メ再ヒ全羅道ニ去ルト云フ昨今家ニ在ルモノ素ト與ニ事ヲ共ニシタルモノニアラス故ニ聊ンテ生ヲ營ムノミ公東學先生ト會談セントスルモ恐クハ難カラント此日俗離山ニ上リ尙探討ヲ試ミントノ議ヲ提出セシモ到底其效ナキヲ以テ止ム直ニ全羅道ニ赴クニ決シ午後二時三十分報恩ヲ發シ行クコト凡三里許「ヨブンハブル」酒幕ヲ經テ「タードン」ニ宿ス

十三日　晴　午後五時宿舍ヲ發シ十一時沃川ニ着ス擔夫足痛ミ歩ム能ハス官廳ニ乞フテ擔夫二人ヲ雇ヒ山岳ヲ踏テ全羅道ニ入リ珍山ヲ去ル一里「ヨカンウヲル」ニ投宿ス時ニ午後八時半、招討使、巡邊使ノ傳令到ル處ニ貼示セラレツ、アリト雖モ道徒ノ動靜杳トシテ知レス或ハ云フ全羅道ノ東南順天ニ屯集スト

十四日　晴　午前四時「ヨカンウヲル」ヲ發シ午後八時高山管內「サンクヂョン」驛ニ宿ス此行路ヲ東南ニ取ラスシテ然カモ西南ニ向ヒタルハ一ハ全州ニ入リテ道徒ノ消息ヲ探リ一ハ以テ旅資ノ調達ヲナサンカ爲ナリ此日始メテ清將聶發スル所ノ令文所々ニ貼付スルヲ認ム「ヨカンウヲル」高山間ハ山高ク水清ク色采尤モ愛スヘシ所在到ル處煙草ヲ產ス

十五日　晴　午前四時「サンクヂョン」ヲ發シテ全州ニ向フ十一時半將ニ東門ヨリ全州ニ入ントス門ヲ衛ルノ兵卒(泌營)貳拾餘名余等ヲ遮リテ曰ク異邦人ノ全州ニ到ルモノアラハ直ニ之ヲ監營ニ通スヘシトノ嚴命アリ乞フ少焉此處ニ休憩セラレンコヲ言辭極メテ叮寧即チ相待ツコト一時間餘、既ニシテ一旗手來リ公文携帶如何ヲ問フ余

示スニ路照ヲ以テス彼文字ヲ解セス直ニ余等ヲ一旅閣ニ導キ且言フ願クハ之ヲ監營ニ示セト路照本ト法式ニ違フ余竊ニ之ヲ危ミ辭ヲ授テ山縣氏ヲ遣ハス氏旗手ト共ニ返リ報シテ曰ク外務衙門發給スル所ノ公文ヲ帶ルニアラサレハ門内ニ出入スルヲ許サスト是レ當然ノ事ノミ余百方辭柄ヲ搆エテ旗手ヲ諭ス彼其責ノ己ニ及ハンコトヲ訴エテ已マス余遂ニ其爭ウノ非ナルヲ察シ乃チ門ヲ出テ行クコト貳里餘藪亭里張斗植ノ家ニ投ス斗植神農ノ遺業ヲ營ム余等亦同業ノ故ヲ以テ相親ミ善シ密ニ道徒ノ動靜ヲ問フ彼抵聲微ニ語テ曰ク道徒ノ首魁姓ハ全名ハ明叔古阜ニ生レ全州ニ住シ才德兼備ル全州ノ敗餘逃レテ目下全州以南ニアリ殘黨昨今亦金溝ニ集マルトノ說頻リニ聞エ金溝ニ赴カハ略ホ其消息ヲ解スル途アラント金溝ハ此地ヲ去ル僅ニ三里一行意氣稍々振フ然カモ錢文今ヤ全ク竭ク則チ斗植ヲ奔走セシメ携ル所ノ寒冷紗及銀貨ヲ售リ漸ク征途ノ費金ヲ調フ

十六日　晴　名ヲ群山行ニ託シ辛ウシテ擔軍二名ヲ雇ヒ午前八時藪亭里ヲ發シ行クコト里餘金溝群山ノ交叉點ニ立チ擔夫ヲ威喝シテ金溝ニ向ハシム擔夫路ヲ誤リ山ヲ越エ林ヲ過キ行程殆ント六里午後五時漸ク金溝ニ着ス金溝ヲ距ル十餘町所在家屋總テ人影ナシ擔夫魂頻リニ悸レ足屢々躓ク金溝ニ到レハ狀況果シテ常ナラス縣督己ニ難ヲ全州ニ避ケ空軒虛屋鱗次トシテ雞犬太タ寂寥ヲ極ム其僅ニ家ニ在ル者亦皆戰々兢々トシテ朝夕ヲ圖ラサルカ如ク或ハ過テ憐ヲ余等ニ乞フモノアリキ食ヲ求メントスルモ一店舗ナク宿ヲ尋レトモ一羈亭ナシ試ニ其故ヲ問ヘハ則チ言フ向日道人三名非命ノ死ヲ遂ク何者ノ所爲タルヲ知ラス道徒等聞テ大ニ之ヲ憤リ罪ヲ縣監ニ嫁シ不日大擧シ來リテ其死屍ノ引渡ヲ請求セントスルノ說アリ狀況故ニ斯ノ若シ道徒今ヤ此地ヲ距ル二三里ノ處ニ會合シツヽアリト日將ニ暮ントス足亦太タ疲ル若カス宿ヲ求メ明日ノ計ヲナサンニハ乃チ土民ヲ慰諭シ兼テ彼等ヲ東道主人トナシ行クコト二十餘町土豪張榮昌ノ家ニ到リ一泊ヲ乞フ主人快ク之ヲ諾ス道徒ノ此地ヲ來往スルモノ概ネ此家ニ入リテ寢食ヲナシ去ルト云フ故ヲ以テ倉廩稍々豐ナリト雖道徒毫モ危害ヲ加エス却テ之ヲ德トス謂ツ可シ多幸ノ人、性溫厚ニシテ余等ヲ遇スル亦殆ント至ラサルナシ顧レハ二十餘日間日ニ三度飲食ヲナシ時ト處トニヨリ其甘臭相同シカラスト雖モ未タ榮昌カ饗セシ酒饌ノ味佳ナルカ如キアラシ此夜榮昌ト語リ大都所全明叔玉果ニ在リ其餘黨此地ヲ距ル二里院坪ニ在ルヲ聞キ覺エス腕鳴リ氣揚ル

十七日　朝來霧深ク十時頃漸ク晴　此日余等故ラニ盛裝美服ヲ着ケ午前八時相顧ミテ一笑厚ク張氏ニ謝シ腕ヲ扼シテ院坪ノ地ニ向フ行クコト二里近午院坪ニ達ス黃巾ヲ纏ヒ火繩銃ヲ肩ニスル者ニ遇フ余麾テ彼ヲ呼ヒ都所ノ所在ヲ問ヒ彼ヲシテ余等ヲ導カシム路傍一小阜アリ松樹蔭ヲナス黃巾ヲ纏ウモノ紫巾ヲ纏ウ者綠巾ヲ纏フ者凡ソ

四五十人皆火繩銃ヲ携フ其巾ヲ纏ハス銃ヲ携エザル者又凡百三四十人左右相錯綜ス
余等一行到レハ道路自ラ開ク乃チ其最モ高キ處ニ登リ三人傲然トシテ相鼎坐シ大聲
先ツ問フニ都所ノ何人ナルヤヲ誰何ス傍ニ人アリ言フ都所ハ則チ彼ト我ナリ余乃チ
筆ヲ呵シテ曰ク兩公且ク座セ余等密ニ告ケントスル所アリ千里ヲ遠トセスシテ此ニ
至ルト命シテ左右ヲ退ケシム彼等唯々是從フ余問フニ日清兵來韓ノ意ヲ知ルヤ否ヤ
ヲ以テス彼等善ク文字ニ嫺ハサルカ如ク逡巡シテ直ニ答ヲナサス余乃チ告テ曰ク清
國夙ニ貴邦ヲ亡滅シ國君ヲ廢黜シテ以テ清ノ一省ナサントスルノ意切ナリ曩ニ公等
ノ義ヲ古阜地方ニ擧ルヤ以爲ラク好機乘スヘシト袁統理世凱即チ密ニ閔惠堂泳駿ヲ
威嚇甘誘シテ無名ノ援兵ヲ清國ニ乞ハシム清兵ノ貴邦ニ來ル一ハ則チ公等ヲ殲殺シ
一ハ以テ貴邦ヲ亡滅セントスル隱計ニ外ナラス我國既ニ公等ノ義擧ヲ贊シ早ク清國
ノ野心ヲ攪破セリ由來兄弟相輔ケ唇齒相依ル一タヒ過タハ百年ノ憂ヲ奈何セン乃チ
直ニ神兵數萬ヲ漢城ニ送ル蓋亦公等ト同心戮力一ハ以テ奸佞ヲ勦除シテ內政ヲ釐革
シ一ハ以テ外敵ヲ膺懲シテ舊邦ヲ維持セントスルノミ公等夙ニ輔國安民ヲ以テ義擧
ヲ企ツ未タ知ラス公等何ヲ以テ此ニ處セントスルカ彼漸ク筆ヲ執リ答テ曰ク鄙等ノ
此處ニ會スル所以ノモノ素ト輔國安民ノ故ノミ然レトモ事ノ大小輕重ニ論ナク一ニ
大都所ノ命ニ是レ由ル願クハ大都所ニ遇テ其詳ナルヲ語レ大都所即今玉果ニ在リト



云フ然カモ日々居處一ナラス途次市民ニ就テ之ヲ聞カハ即チ知ルヿヲ得ヘシト彼等
余ノ所告ニ對シ一々其答ヲナサスト雖モ善ク理ニ服シ深ク義ニ感スルノ情自カラ彼
等ノ對話間ニ彷彿タリキ彼等トハ則チ趙元執及金允浩ノ兩人ニテ年齒共ニ未タ不惑
ニ達セサルカ如シ所謂彼等ハ金溝會所ノ都所即チ統首ニシテ其他都察、省察、一砲、
二砲某々アルモ一々其名ヲ記セス兵員一千人アリ金溝會所ノ統率ニ係ルト云フ擔軍
四方ヨリ米麥ヲ運ヒ俵數凡三十有餘アリ恐クハ是徵發ニ係ルモノナラン余等此ヨリ
南玉果ニ赴ント議シ先ツ午餐ヲ喫センヿヲ謀ル都所忽チ令ヲ傳ヘ二三子ヲシテ余等
ヲ飲食舖ニ導キ饗應ヲナサシム食了ルノ比趙都所來リテ送別ノ辭ヲナシ午後二時道
人十餘名ニ送ラレ院坪ヲ出テ七時泰仁ヲ過キ一里「トリパックリ」酒幕ニ投ス

十八日　午前五時「トリパックリ」酒幕ヲ發シ「チユンヲツク」峴ヲ踰テ潭陽ニ向フ途上
道徒二十餘名ニ邂逅ス曰ク大都所ノ命ニヨリ昨和須ヲ發シ一旦鄕里古阜ニ歸ルト曰
ク昨今農事多端姑ラク故鄕ニ還リテ定業ヲ務メヨ若シ夫緩急アラハ更ニ命ヲ傳フヘ
シト云々曰ク大都所光州ニ在リト、午後三時一天俄ニ曇リ電閃雷擊猛雨沛然トシテ
至ル雨ヲ衝キ八時漸ク潭陽ニ着ス泰仁潭陽間村落相繼ク而シテ土民概ネ道人ナラサ
ルハナシ門頭「非道人不許入此門」ノ標札ヲ掲クルモノ兩三家アリ以テ此地方ノ人氣
ヲ知ルヘシ余等就テ大都所ノ所在ヲ問ヒ且ツ告ルニ日清兵ノ來意ヲ以テス此日始メ

テ竹林ノ所々ニ點綴スルヲ見ル

十九日　晴　午前八時潭陽ヲ發ス大都所光州ヲ去テ南平ニ赴クト云フ午後三時半光州ニ着シ拱北門外ヲ過テ南平ニ向フ道徒ノ往來冠蓋相望ム或ハ傳令ノ爲メ潭陽金溝方面ニ赴クモノ或ハ大都所護衛ノ爲メ羅州又ハ和順地方ヨリ來集スルモノ事態頗ル喧擾ヲ極ム午後八時南平ニ着ス聞ク大都所正午此地ヲ去リテ綾州ニ向フト日已ニ暮レ身心稍々疲ル即チ旅宿ヲ求ム飯米ナキヲ以テ之ヲ謝ス道徒ノ徵發ニ遭ヘハナリ若カス道徒ヲシテ之カ斡旋ヲナサシメント尋テ道徒會スル處ニ至レハ何ソ圖ラン彼等ハ官廳ヲ占領シテ其營所ニ充テ集ル者凡二百餘名明朝綾州ニ向テ進ムト余等告ルニ旅亭ナキヲ以テスレハ彼等ハ喜ムテ余等ヲ客室ニ招シ酒饌ヲ具ヘテ厚ク遇シ明朝同行ヲ約シテ共ニ寢ニ就ク

二十日　午前九時道徒等ト共ニ南平ヲ發シ午後一時綾州ニ着ス大都所果シテ綾州ニ在リ官廳ヲ以テ本營ニ充テ人馬相絡繹ス本營ハ白地ノ幔幕ヲ門前ニ環ラシ令字ヲ刺繡セシ將旗四旒ヲ庭上ニ樹テ威儀頗ル隆ナリ即チ刺ヲ通シテ面會ヲ求ム直ニ余等ヲ門内ニ請シ與ルニ客室一間ヲ以テス少焉シテ彼ヨリ紙箋ヲ贈リテ曰ク

意ハサリキ貴國諸位大人陋地ニ稅ス未タ知ラス何ニ緣テ遠路跋渉スルヤ之カ爲メ代テ良苦ヲ問フ幸ニ憊ナキヤ否ヤ



余答書シテ曰ク

伏テ慰問ヲ承ク感悚交々至ル鄙等山ヲ踰エ水ヲ渉リ千里ヲ遠トセスシテ來ル所以ノモノハ則チ實ニ大都所全道士明叔先生ニ謁シ少シク敎ヲ乞ハント欲スルノミ

彼曰ク

全州接戰ノ際全大人丸ニ中ル今ハ則チ嶺外ノ地ニ在リテ傷ヲ治ス曩ニ貴國十四大人ニ向テ贈問ノ時靈岩地居住金奉均等承答ス

余以爲ラク全明叔綾州ニ在リト沿道ノ土民既ニ之ヲ語ルノミナラス綾州ノ道徒又之ヲ言フ然カモ其答ル所斯ノ如シ蓋シ大ニ警戒スル所アルナラン乎且十四大人トハ某々ナルヤヲ詳ニセスト雖モ漢城出發ノ際密ニ聞ク所アリ或ハ玄洋社中ノ人々ナルヤモ計リ難シ余仍チ答テ曰ク

全大人嶺外ノ地ニ在リ識覈ノ榮ヲ蒙ル能ハス遣憾焉ヨリ大ナルハ莫シ惟ニ貴所必ラス統首其人アルヘシ乞フ統首ニ謁スルヲ得ハ幸甚

少焉アリテ四五人ノ從者ヲ伴ヒ來テ余等ノ前ニ坐スル者アリ年齒凡三十八九風采衆ニ卓越ス彼筆ヲ執テ書シテ曰ク

公等千里ヲ遠トセスシテ來ル知ラス何ヲ以テ鄙等ニ敎ントスルカ願クハ其詳ナルヲ聞クヲ得ン

余先ツ問ニ何人ナルヤヲ以テス果シテ金奉均其人ナルヲ知ル余乃チ書シテ曰ク

伏シテ惟フニ大祖大王至聖明德允文允武命ヲ皇天ニ受ケ鼎ヲ漢城ニ定ム世々代々王子孫相嗣キ玆ニ五百有餘載其間世ニ盛衰アリ時ニ隆替アリト雖モ政紀紊亂シテ吏錢穀ヲ貪リ誅求劇甚ニシテ民塗炭ニ苦ムコト未タ今日ノ如ク甚シキハアラサルナリ夫レ天下ハ天下ノ天下ナリ一人ノ天下ニアラサルナリ閔族久シク外戚ノ威ヲ恃ミ永ク政權ノ柄ヲ握リ社稷ノ存亡ヲ慮ラス闔族ノ盛衰ヲ是レ憂ヒ民人ノ日ニ疲弊スルヲ顧ミス私廩ノ月ニ豐富ナラサルヲ是レ患フ賄賂上ニ行ハレ盜賊下ニ起ル國家ノ亡ヒサルモノ抑モ幸ノミ公等深ク玆ニ慨シ曩ニ一タヒ輔國安民ノ義旗ヲ古阜地方ニ樹ツルヤ特リ貴國生民ノ簞食壺漿シテ之ヲ迎フルノミナラス世界萬國皆之ヲ景仰ス就中弊邦朝野貴賤ニ論ナク國ヲ擧テ歎賞措カス但清國ハ獨リ然ラス夙ニ朝鮮ヲ亡滅シ國王ヲ癈黜シテ以テ清國ノ一省トナシ李中堂ノ義子李經芳ヲシテ其總督トナサントスル志ヲ抱クヤ久シ以爲ラク此機逸スヘカラスト是ニ於テ乎李中堂密ニ命ヲ袁世凱ニ致ス世凱中堂ノ意ヲ承ケ暗ニ奸臣閔惠堂泳駿ト結ヒ泳駿ヲシテ遂ニ援兵ヲ清國ニ乞ハシム清國大謀己ニ成レルヲ喜ヒ名ヲ公等討伐ニ借リ猝ニ兵三千餘ヲ牙山ニ送ル此時ニ當リ貴國ノ存亡殆ント機一髮ノ間ニ在リ岌々乎トシテ夫レ危カラスヤ弊邦素ト義勇ヲ以テ天下ニ知ラル焉ンソ坐シテ隣邦ノ他國ニ



呑噬セラル、ヲ視ルニ忍ヒン乃チ直ニ貔貅三萬ヲ貴邦ニ輸ス漢城龍山萬里倉楊華鎭松坡坡州水原仁川釜山元山所在到ル處ノ要害ヲ扼守シテ遺算ナシ而シテ隊伍整齊號令嚴肅銃器糧食兼備ルヲ以テ沿道ノ士民皆仰テ風ヲ望ミ俯シテ心ヲ安ンセサルモノナシ眞ニ古ノ王者ノ師ト雖モ以テ之ニ加ルナシ若シ夫レ清兵ハ軍ニ紀律ナク令ニ節制ナシ猥リニ牛馬ヲ掠奪シ恣ニ婦女ヲ姦淫ス是故ニ清兵ノ過ル所家ニ米麥ナク戶ニ鷄犬絕エ士民怨嗟ノ聲殆ント聽クニ堪エス是豈ニ無賴草竊ノ徒ニアラスシテ何ソヤ事態實ニ斯ノ如シ苟モ朝鮮ノ粟ヲ食フモノ豈ニ袖手坐視スルノ秋ナランヤ宜ク應ニ半夜鷄ヲ聽テ奮然ト起チ中流揖ヲ擊テ猛然ト進ミ內ハ奸臣ヲ黜ケテ以テ宮府ヲ淸メ外ハ敵兵ヲ討シテ以テ宗社ヲ保タスンハアルヘカラス公等既ニ輔國安民ヲ以テ義擧ヲ企テシハ天下ノ知悉スル所然ラハ則チ今ヤ必ラスヤ當ニ檄ヲ四方ニ傳ヘ以テ再擧ヲ計ルヘキハ亦天下ノ確ク信セサラントスルモ能ハサル所ナリ然リ而シテ不幸來タ其消息ヲ詳カニセス是レ鄙等ノ晝伏シ夜行キ山岳ヲ踏ミ河川ヲ涉リテ而シテ來ル所以ナリ知ラス公等以テ如何ト爲ス敢テ示教ヲ乞フ

彼筆ヲ執テ曰ク

曩日貴國十四大人ニ遇フノ時公カ敎ル所ヲ以テ又鄙等ニ敎ユ惟フニ公等亦同義ノ人ナルカ

余曰ク
弊邦十四人ハ其何人ナルヤヲ詳カニセス彼等ハ東萊ヨリ至ルモノナルヘシ鄙等ハ漢城ヨリ來ル者固ヨリ相識ラサルノ人々ナリ然モ相識ラサルノ人ニシテ其陳ル所相同シ是レ弊邦國論一定不渝ノ徵證ニアラスヤ抑モ我軍ノ貴邦ニ來ル實ニ公等ト相結ヒ内外呼應シテ以テ一ハ内政ノ釐革ヲナシ一ハ外敵ヲ討伐シ社稷ヲシテ泰山ノ安キニ置キ生民ヲシテ永ク鼓腹擊壤ノ樂ニ饜シメント欲スルノミ公等ノ義舉ヲシテ始アリ善ク終リアラシムルモノ此好機ヲ逸シテ果シテ何レノ時ヲカ竢タントス

彼曰ク
弊邦何等ノ前惠アリテ貴國弊邦ノ爲ニ盡瘁スル一ニ斯ノ如キヤ聞ク貴國途ヲ弊邦ニ假リ清國ヲ征セントスト片々雪ノ飛ヒ來ルカ如シ知ラス果シス此事アルナキカ

余曰ク
貴國ト弊邦ト其誼一日ニ非ス古ヨリ既ニ兄弟ノ國ト稱ス且夫貴國ト弊邦ト譬ヘハ猶唇齒相依ルカ如シ貴國ノ存亡引テ弊邦ノ安危ニ關シ貴國ノ盛衰惹テ弊邦ノ隆替ニ係ル前惠後報將タ何ソ問フ所ソ公ノ賢明ニシテ豈之ヲ知ラサルラン況ンヤ弊邦



途ヲ貴國ニ假リテ清國ヲ征セントスル說ノ如キ是三百餘年前ノ夢譚ノミ尤モ笑フ可シ

彼曰ク
謹テ貴敎ヲ承ク鄙等素ト農ヲ業トスル者出テハ則チ耒耜ヲ執リテ稼穡ノ業ヲ務メ入リテハ則チ經術ヲ講シテ義理ノ道ヲ修ム若シ夫我宗社ニ害ヲナス者アレハ肝腦地ニ塗ルト雖モ止マス公ノ敎ル所己ニ斯ノ如シ鄙何ソ敢テ疑ハン然リト雖モ若シ公ノ心ト公ノ筆ト相協ハサルカ如キアラハ咫尺ノ間當ニ血濺クコトヲ得ヘキノミ

余曰ク
蓋聞ク貴國人頗ル猜疑心ニ富ムト公ノ敏達ヲ以テ尙此言アリ余ハ只長大息スルアルノミ公若シ余ヲ疑ハヽ須ラク公カナサント欲スル所ヲナセ

彼曰ク
靈犀相通シ肝膽相許ス尙何ノ疑フ所アランヤ但我ニ在リテハ時機未タ到ラス暫ク秋來ヲ待テ再ヒ事ヲ擧ケントス其時必ラス當ニ通信ノ計ヲナスヘシ此ヲ以テ焉ヲ諒セ

余又曰ク

夫兵ノ勝敗ハ名ノ順逆ニ依ルト雖モ抑モ亦兵器ノ鋭鈍如何ニ關スルヤ至テ大ナリ鄙等貴兵携ル所ノ銃砲ヲ視ルニ多クハ是火繩銃ノミ火繩銃ハ既ニ陳腐ニ屬シ列國共ニ之ヲ用ユルナシ公等若シ更ニ鋭利ノ銃刀ヲ要セハ當ニ送呈ノ計ヲナスヘシ如何

彼曰ク

感甚々々今若シ貺ル所ノ銃刀ヲ領受セハ必ラス指目ノ煩アルヘシ他日再擧ヲ圖ルノ時亦當ニ通求スヘシ願クハ其時ヲ以テ惠投セヨ如何

余ノ奉均ト對談スル所殆ント數百言ニ渉ルト雖モ其概要ヲ摘記スレハ則チ右ノ如シ奉均眉自清秀文章亦凡ナラス其言語動作ヲ以テ之ヲ視ルニ蓋シ尋常一樣ノ將校ニアラサルカ如シ以爲ラク彼若シ全明叔ニアラサレハ必ラス帷幕帳中ノ張子房ナラント後チ二三兵士ノ告ル所ニヨリ果シテ大都所全明叔タルヲ知ル此日將士代ル代ル來リテ厚接歡待殆ント至ラサルナシ余等亦中心欣快ニ禁エス牛飲馬食敢テ饜クコトヲ辭セサリキ夜ニ入レハ遙ニ劉喨樂ヲ奏スルノ聲アリ正ニ是大都所寢ニ就クノ時意氣一ニ何ソ悠揚タル

二十一日　朝來微雨　早朝慰問ヲ受ク余明叔ト問答五六回明叔今午東南ニ向テ巡視スト是ニ於テ略ホ互ニ通信ノ處ヲ指示ス蓋シ明叔巡視ノ目的ハ實ニ恩威ヲ沿道ニ施シテ米錢ノ徵發ニ忙シキカ故ノミ昨日一僧ヲ縛シ來リテ痛ク鞭撻ヲ加エ又一豪士ヲ嚴諭シテ直ニ緡錢ヲ齎ラシ來ルヲ見ルカ如キ亦其例ナリ余等竊ニ以爲ラク今ヤ幸ニシテ明叔ト會見シ以テ胸中ノ磊塊ヲ澆ク彼稍々余等ノ說ノ所ニ陽從スト雖モ中心尙ホ危疑スル所アリ況ンヤ亦一面識ヲ以テ人ノ肺腑ヲ攬ル談何ソ容易ナラン彼ヲシテ深ク我等ヲ信賴セシメントセハ當ニ事實ヲ以テ彼ノ心ヲ動スニ若カス此ヨリ相別レ直ニ京城ニ還リ早ク之カ備ヲナシ以テ再來ノ計ヲナスヘシト乃チ玆ニ慇懃相別ルヽノ辭ヲ交ユ彼贐ルニ錢三十緡(拾五貫文)ヲ以テシ且馬匹ヲ以テ余等一行ヲ送ラントス余等亦贈ルニ長短二刀銀貨三金及藥劑二瓶ヲ以テス互ニ相辭スレモ可カス午前九時岐ニ臨ミ明叔自ラ門外ニ出テ兵ヲ營外ニ閱シ余等ヲシテ樓上陪觀セシム五十人ヲ一隊トナシ各隊ヲ〻字形ニ分列ス巾ヲ纏ヒ銃ヲ荷フノ狀稍々兒戲ニ類スト雖モ善ク號令ニ隨ヒ進退度ヲ失ハサルハ寧ロ愛スヘシ繰練了ルノ後各兵士ニ各々五百文宛ヲ給シテ之ヲ犒フ士民ノ明叔ヲ尊崇スル亦宜ナリト謂フヘシ明叔ノ幕下ニハ朴永浩鄭萬石金某崔某文某其他都省察金炳嚇省察三十餘人ノ將校アリト雖モ共ニ談スヘキノ材ニアラス午前十一時右ノ諸氏ニ送ラレ更ニ再會ノ盟約ヲ誓ヒ綾州ヲ出テ去テ羅州管內榮山ニ向フ榮山ヨリ韓船ニ艤シ木浦ニ出テ汽船又ハ我漁舟ニ搭シテ仁川ニ還ラント欲セシノミ岐ニ臨ミ道徒ヨリ種々請託ヲ受ク其重ナルモノハ日本刀六穴銃蝙蝠傘

ノ類ナリ午後三時半榮山ニ着シ匹馬ヲ返ス舟ヲ求ムレトモ得ス榮山地方多ク藍ヲ植ユ頗ル珍ト爲ス

二十二日　時々驟雨　拂曉山縣氏ヲ二里餘ノ處ニ派シ漸ク扁舟一隻ヲ求メ正午榮山ヲ發シ午後二時電浦ニ着ス十時金某ノ船ニ轉乘シ離別江ヲ下ルコト三里落潮ノタメ一夜蘆中ニ泊ス

二十三日　此日終日雨甚シク臥スルニ室ナク食ニ魚肉ナシ舟中ノ艱陸上ノ艱ニ勝ルコト數等

二十四日　晴　午前八時半漸ク木浦ニ着ス聞ク再昨及昨日韓船數隻群山ニ向テ出帆シ去ル今在ル所ノ二隻ハ共ニ珍島行ノミト囊裡ノ旅費將ニ竭キントシ長途ノ困憊日ニ益々加ル余等ノ失望落膽寔ニ想フヘシ然モ事茲ニ到ル竟ニ奈何トモスヘカラス乃チ更ニ一段ノ勇氣ヲ鼓シ陸行群山ニ向フニ決ス直ニ擔夫一名ヲ雇フテ木浦ヲ發シ午後七時務安ヲ去ル半里廣石店ニ投宿ス此地方粟及高粱多シ

二十五日　旅費缺乏ノ故ヲ以テ擔夫ヲ雇フヲ止メ携帶品ヲ三分シテ各々其一ヲ荷ヒ午前四時廣石店ヲ發シ午後九時靈光ヲ過ク道徒二百餘人官廳ニ屯ス余等一行ヲ遮リテ喃々止マス此日余等身體太タ疲レ日脚又已ニ落ツ一々問答ノ煩キヲ以テ却テ大ニ彼等ヲ詰罵ス然モ終ニ其驗ナシ即チ金溝ニ於テ告ル所ヲ以テ又彼等ニ告ケ辛フシテ熱



鬧高中ヲ遁レ拱北門ヲ出テ半里一農家ニ宿ス道徒ノ余等ヲ停ル所以ハ蓋シ外人ノ此地ヲ過クルアラハ必ラス其通行理由ヲ尋問スヘキ命ヲ受ケタルニ因ル寧ロ用意ノ周到ヲ見ルヘシ都所ニ遇フ其名ヲ逸ス道徒二千餘名アリト云フ此日覺ニ夕餉ヲナサス

二十六日　晴　午前五時農家ヲ發シ茂長ヲ經午後九時興德ヲ去ル一里「アルメチヤン」酒幕ニ宿ス途中道徒七八名ニ遇フ曰ク興德ニ屯集スルモノ約二百餘名ト

二十七日　晴　午前七時「アルメチヤン」ヲ發シ午後八時扶安ヲ過キ半里餘ノ處ニ宿ス扶安興德共ニ道徒多數屯集スト云フト雖モ城内ニ入ラサルヲ以テ其數ヲ詳ニセス此地方鹽田多シ

二十八日　晴　午前二時半宿驛ヲ發シ萬頃ヲ過キ午前四時漸ク群山ニ着ス韓船ノ港内ニ在ル者帆檣林ノ如シ然モ一隻ノ仁川ニ航セントスルモノナシ余等ノ術計實ニ茲ニ至テ全ク盡ク嗟嘆之ヲ久フス既ニシテ相慰テ曰ク天若シ余等ヲ棄テスンハ不日必ラス一舟ヲ與エン若カス默食靜臥シテ以テ萬一ヲ僥倖セント圖ラサリキ黄昏一韓奴來リ語テ曰ク錢文ノ多少ニ依リ公等ヲ仁川ニ送致スヘシト其價ヲ問ヘハ則チ六十貫文ト答フ貪ルモ亦甚シカラスヤ顧レハ囊底錢已ニ竭ク而シテ其高廉ヲ云爲スレハ彼飄然トシテ去ラントス乃チ意ヲ決シテ之ヲ傭フ至リ視レハ實ニ是レ眇乎タル一端舟ノ

ミ僅ニ數人ヲ容ルヽニ足ル相顧テ呆然少焉シテ共ニ戲テ曰ク余等既ニ福島中佐ヲ彷彿ス群司大尉豈與シシ難ランヤト笑フテ而シテ舟ニ上ル此夜苫席ノ下無何有ノ鄉ニ入ル

二十九日　晴　午前八時半愈々小舟ニ棹シテ群山ヲ出帆シ午後二時忠清道庇仁縣馬梁浦ニ泊ス

三十日　晴　午前五時馬梁ヲ發ス黃昏遙ニ軍艦六艘ヲ海霧模糊ノ間ニ認ム午後九時又軍艦二艘ノ間ヲ過ク何レノ軍艦タルヲ知ラス十一時舟平薪ニ泊ス當時焉クンソ知ラン八艘ノ軍艦ハ皆帝國軍艦ニシテ然モ前日此海面即チ豐島冲ニ於テ日清艦隊ノ一大激戰アリシトハ後之ヲ聞テ余等ノ運命太タ强カリシヲ祝ス

三十一日　晴　未明平薪ヲ發シ午後八時頃仁川冲ニ泊ス途中清人二名島中ニ在ルヲ聞ク

八月一日　晴　午前六時余等滿腔ノ愉快ト前途ノ光明ヲ載セ漸ク舟ハ仁川領事館下ニ着ス三人相顧ミテ共ニ海陸ノ無難ヲ祝シ躍然身ヲ水津旅館ニ投ス問フニ我軍ノ消息ヲ以テスレハ曰ク廿三日我兵韓兵ト戰ヒ四十分ニシテ王城ヲ警衞スト曰ク廿五日我艦隊清國艦隊ト豐島冲ニ於テ對戰一艘ヲ拿捕シ二艘ヲ沈沒セシムト曰ク三十日我兵成歡驛ニ於テ清兵ト相挑ミ五時間ニシテ牙山營ヲ陷ルト連戰連捷ノ報殆ント耳ヲ劈クカ如シ余覺エス啞然トシテ嘆シテ曰ク遂ニ孺子ヲシテ名ヲ成サシムルカト嗚呼余等ノ此行陸行百拾餘里海航七拾餘里日ヲ閱スルコト二十有九日錢ヲ費スコト十百有餘圓其間ノ苦辛經營蓋シ筆舌ノ能ク悉ス所ニアラス會々語ルニ道徒ノ動靜ヲ以テスルモ聽クモノ單ニ一場ノ茶話ニ付シ去ルノミ勞シテ效ナキモノ孰レカ之ヨリ甚シキモノアランヤ抑モ知ラス道徒カ今日ニ於ルノ價値果シテ斯ノ如クナルヘキカ此日水津方ニ宿ス

二日　晴　午前十一時陸軍御用船釜山號ニ便乘ヲ乞ヒ午後十時龍山ニ着シ十一時漢城ニ歸ル滿天星斗夜沈々

余枕ニ倚リ獨リ自ラ語テ曰ク我軍海陸ノ連捷喜フ可キハ則チ喜フ可シ未タ狂シテ喜フ可キノ時ニアラス朝鮮政府ノ革新可ハ則チ可ナリ未タ寸時モ心ヲ緩フス可キノ秋ニアラス聞ク將卒已ニ勇ニ誇リ有司又功ヲ衒フト抑モ底ノ心ソヤ對清ノ事余暫ク論セス若夫朝鮮政府ノ革新ハ今日如何ノ方鍼ニ依リ如何ノ進捗ヲナシツヽアルヤヲ知ラス群小鼎ヲ弄ス餗ヲ覆サヽルモノ未タ之レアラサルナリ惟フニ新政府ハ道徒ヲ友トシテ多大ノ利ヲ見スト雖モ若シ之ヲ敵トナサハ至重ノ害ヲ蒙ルニ至ルヘシ今ヤ之ヲ敵トシ之ヲ友トナス寔ニ機一髮ノ間ニ在リ知ラス新政府カ道徒ニ對スル成竹已ニ立ルヤ否ヤ

義擧ヲ企ルモノハ則チ道人ノミト是レ全羅道通有ノ識念ナリ故ニ道人タラスンハ義擧ニ加ルヲ得ス所謂百有八顆ノ珠數ヲ携ルモノニシテ始メテ義擧宗ノ門徒トナルヲ得ルノミ義擧トハ何ソヤ輔國安民ノミ一言之ヲ掩ハ則チ民ヲ濟フニ在リ濟民義所ナル四文字ハ即チ彼等カ用ル所ノ印章ナリ故ニ民ノ害ヲナスモノハ皆彼等ノ敵ナリ敵一ニシテ足ラス敵ノ敵アリ敵ノ又敵アリ彼等ハ單ニ守令ノ黜陟ヲ以テ足レリトナスモノニアラス隴ヲ得テ蜀ヲ望ムハ蓋シ常情ノミ彼等若シ糧足リ兵充ツレハ或ハ憾天動地ノ活劇ヲ演スルヤ未タ計ルヘカラス今日ニ在リテハ余ハ彼等ヲ以テ直チニ彼等自身ニ革新軍タルヲ得ルト言ハス然レモ余ハ斷シテ言フ彼等ヲシテ革新軍タラシムヿヲ得ヘシト全羅道全州ヲ去ル三里其以南以東以西ハ既ニ大都所全明叔ノ命是レ從フ者ノミニアラスヤ忠清道木川以南ノ地亦道學ヲ奉スルモノ十中八九或ハ多少系統ヲ異ニスルアリト雖モ既ニ今回相戮力スル者アルヲ以テ之ヲ觀レハ今後其連絡ヲ共ニセシムル得テ難キニアラス聞ク慶尙江原亦多數ノ道人アリト彼等稱シテ吾徒數百萬人アリト云フ素ト誇辭ニ屬スト雖モ蓋シ少小ニ非サルヘシ曩ニ羅州ノ牧使故ナクシテ道人三十二人ヲ殺害ス部下ノ者直ニ討テ之ヲ誅セントス明叔之ヲ止ム謂ラク農ハ國ノ本ナリ五六月ノ交ハ則チ農事ノ尤モ重要ナル時節ナリ此際ニ當リ一旦干戈ヲ動カス濟民ノ意ニ戻ルヤ大ナリ且ツ糧食ヲ得ルノ途難シ加カス秋收ノ候ヲ竢テ以テ事ヲ擧ケント此レ現下明叔カ頻リニ各色ヲ輪廻シ一方ニ於テ金穀ヲ徵發シテ他日ノ度支ニ備エ他方ニ於テ務メテ隱德ヲ施敷シ以テ百姓ノ聲望ヲ收ルニ是レ汲々焉タリ顧レハ今ヤ天下ノ形勢全ク豹變ス知ラス新政府ニ對スル彼等ノ感想亦果シテ如何新政府ノ施設恰モ水ノ担々流ル、カ如ク行ケハ則チ止ム苟モ民ノ意ニ觸レ民ノ心ヲ傷ケ竹槍席旗ノ四方ニ起ルコトアリトスレハ恐クハ道徒此カ動機タルコトヲ豫メ覺悟セサルヘカラサルナリ知ラス新政府ノ所見果シテ如何

起テ窓ヲ開ケハ半天雲起夜色暗憺

（七十四頁の續き） 明朝開くべき鉢を取り入れたりまでした。

長崎村に寓居してからも、その餘り廣くない庭に草花、花樹を歩く處もない程植えて樂しむでゐた。勿論朝顏も。身罹る年、即ち去年は遺がに余程身體が大儀であつたらしく、あまり手をかけなかつた。でも三十鉢ばかりの朝顏が、代る代る、故人の病床を慰めてゐた。

身罹る前日である。あまりの苦しさに耐へ切れずに、故人は、醫者や看護婦の制止に逆つてむつくり起き上つた。

「うん、何か花が咲いてるな」

故人は呟いたのである。思ひがけない言葉であつた。夏咲のコスモスが、やうやく一つ二つ小さな紅い花をつけはじめてゐたのが、病苦に我を忘れる程の故人の目に映つたのだ。

「えゝ、綺麗に咲きました」と私は辛じて答へたのである。醫師の言葉もあつたが伯母も私も「ほんとに、いけないのかな」と、

（百四頁へ續く）

# 南征餘錄

一行清州ニ着シ客舍ニ入ル安着ノ小宴ヲ張ント欲シ鷄一羽ヲ買フ韓人等其料理方ヲ見ントシテ庭上ニ群集ス近藤君左手ニ鷄ヲ捕ヘ右手ニ二寸大ノ小刀(メス)ヲ持チ樣ニ出テ鑿々刀ヲ使フ忽チニシテ骨ト肉ト相分レ一指ヲ汚サスシテ立ドコロニ寸斷分截ス觀者タ・口ヲ開キ目ヲ張ルノミ既ニシテ鍋ニ湯ヲ沸シ其肉ト骨トヲ投シ食鹽少許ヲ入テ「スープ」ヲ作リ更ニ藥籠ヨリ「アルコール」瓶ヲ出シ溫湯ニ數滴ヲ加ヘ三人相對シテ快ク飲食スル有樣ヲ視孰レモ不思議ソーナ顏ヲシテ相顧ミテ密語スルノ狀覺エス失笑ニ堪エサリキ

◆昨年暴徒ノ發生地タル報恩ニ入リ東學先生ノ消息ヲ尋ヌレトモ其後患ヲ恐ル、ニヤ邑民擧テ皆知ラスト答フ余一策ヲ案シ僞テ余等亦日本ノ道士ナリト告ク坐ニ一老翁アリ語テ曰ク我國ノ東學ヲ修ル者或ハ一日千里ヲ駛走スル者アリ或ハ口中火鐵ヲ呑吐スルモノアリ其術ノ奇ニシテ變寔ニ測リ知ルヘカラス公等言フ日本ノ道士ト知ラス何等ノ神術ヲ修メ得タル乞フ一技ヲ示スヲ獲ント一坐皆乞フテ已マス蓋シ余等ノ道士如何ヲ疑ヘハナリ余徐ニ說テ曰ク我邦ノ道術タル道通天地有形外思入風雲變態中、拔山倒



海、目千年ノ後ヲ視、耳萬里ノ外ニ聞ク神變自在得テ端倪スヘカラス千里ノ駛走口中ノ鐵何ンカ有ラン但濫リニ之ヲ施シ戲ニ之ヲ行フ神意ニ戾ル遠矣試ニ一椀ノ冷水ヲ沸騰セシメ直ニ化シテ鹹水トナサンカ乃チ密ニ沸騰散テ掌ニシ口中咒文ヲ唱エテ沙鉢ヲ掬一撮ス忽チニシテ沸騰シ忽チニシテ鹹水トナル滿坐驚キ且之ヲ異トス近藤君亦砂糖ト食鹽トヲ手ニシテ相左右シテ之ヲ嘗メシム甘鹹忽チ相變ス砂糖ヲ嘗ルモノ喜色面ニ溢レ食鹽ヲ嘗ルモノ號呼眉ヲ顰ム嘖々相語リテ其妙技ヲ賞讃ス眞面目ナラントスルモ豈敢テ失笑セザルヲ得ンヤ

◆忠淸全羅ノ界、山嶺疊重溪谷紛縫寒村落寞家ニ雞犬ノ聲ナク野草亂蔓路ニ往來ノ人ナシ偶マ山中ノ一農家ニ憩フ家人相顧ミテ余等ヲ熟視シテ曰ク公等ハ何國ノ人ナリヤト山縣氏直ニ日本人ナリト答フ彼等又相顧ミテ怪テ言フ日本トハ何處ノ國ナリヤト余徵笑ヲ含ムテ告テ曰ク汝等ノ所謂倭奴ト稱スルハ即チ日本人ノ謂ナリト衆亦相顧ミテ苦笑ス一老媼アリ遽々然トシテ來リ前ノ余等ヲ諦視スルコト之ヲ久シテ語テ曰ク吾聞ク倭奴ハ資性獰惡ニシテ人ノ民ヲ害シ人ノ國ヲ奪ウ猛獸毒蛇モ啻ナラスト今公等ヲ觀ルニ眉目清秀手指潤澤其風貌ノ溫雅ニシテ擧作ノ重厚ナル我邦人ノ遠ク及ハサル所ナリ未タ知ラス年齡幾何、兩親ハ健在ナリヤ、兄弟幾人、子女幾人ト余與ルニ砂糖少許ヲ以テス媼曰ク是レ鹽カト余先ツ嘗ム彼見テ少シク嘗メ後人ヲ顧ミテ喜色面ニ溢ル衆

ヲ提招テ少シッヽ、配ッ衆皆大ニ喜フ余穩ニ媼ニ諮リテ曰ク酒ヲ賣ル家無キヤ有ルヤ媼曰ク在リト欣々焉トシテ去ル少焉クシテ沙鉢三個ヲ六角膳ニ載セ鹹辛一皿ヲ挾ムテ余カ前ニ勤メ曰ク自ラ釀ス所ナリト余受テ之ヲ一氣飲了ス味尋常ニアラス媼走リテ又一鉢ヲ勸ム近藤山縣二氏余ヲ顧ミテ言フ甘哉濁酒ニシテ何スレソ滋味斯ノ若クナル蓋シ山間ノ地水清冽ニシテ米仍ホ精、後ハ山ヲ負ヒ前ハ溪流ニ臨ム林木自然ニ風塵ヲ避ケ人間總テ古色ヲ帶フ況ンヤ余等身嶮阪ノ上下ニ苦ミ體三伏ノ暑熱ニ倦ム神疲レ氣屈ス舌鼓ヲ打ッ何ソ渴後ノ水ニ較スヘケンヽ尋テ其價ヲ問フ曰ク不要了ト余韓錢數十文ヲ投ス媼言フ日本ト我國ト錢ニ於テ毫モ異ナルナシ果シテ然ルカト余與ニ乘シテ銀貨三個ヲ出シ何スレソ夫レ然ラン朝鮮ノ如キ世界ノ貧國ナリ故ニ靑銅錢ヲ獲テ上下得々タルノミ我國ノ通貨ハ即チ金ト銀トノミ宜シク就テ之ヲ見ルヘシト媼再拜謝シテ曰ク冀クハ韓錢幾十文ヨリ此銀貨一個ヲ與ヘヨト余啞然言フ所ヲ知ラス

◆沃川ヲ距ル數里一村落ヲ過キテ暫ク村畔ノ一社頭ニ憩フ村衆相踵キ來リテ余等ヲ圍集シ相語テ曰ク彼三人者帶ル所ノ刀劍善ク人ヲ斬ルヲ得ヘキヤ否ヤ曰ク未タシト冷嘲謾罵交々聞ユ忽チ一壯漢アリ來リ前ンテ曰ク公等帶ル所ノ刀善ク物ヲ斫ルヤ否ヤ乞フ此棍棒ヲ斷テ其功味ヲ示セト余曰ク喝坐セ一刀汝ノ身首ヲ兩斷シテ其利鈍ヲ試ムヘシト彼首ヲ縮メテ忽チ衆後ニ隱ル又一壯漢アリ來リ前ンテ曰ク公等乞フ彼ヲ恕セヨ余等未タ日本刀ヲ見ス願ク𠮟ハ鞘ヲ拂テ其中身ヲ示セト近藤君起テ大聲疾呼シテ曰ク群衆來リテ余カ前ニ進メ好シ汝等ノ爲メ目本刀ヲ示サント衆皆進ム近藤君衣ヲ褰ケ袖ヲ扼シ居合腰ニナリテ三尺大ノ長劍ヲ揮一揮ス衆瞠目駭魂相蹶テ走ル長劍己ニ鞘中ニ在リ能ク之ヲ見シモノナシ相顧ミテ哀號幾番、己ニシテ近藤君亦呼號シテ曰ク爾等皆來リテ余ニ敵セヨ余一人ニシテ能ク爾等ニ敵セント大手ヲ擴ケテ步ム彼等疾走遽馳遠ク去テ遂ニ近カス

◆珍山高山ノ間山峻ク谷邃ク道路險惡一上一下身足大ニ疲ル而シテ夕陽已ニ落チ人ハ朧朦糢糊ノ間ヲ牛步ス偶マ山間ニ一草屋アリ壁墜チ軒頹陋穢勝テ言フ可ラス與暮連叫一夜ノ宿リヲ乞フ老媼出テ來リ余等ノ行裝ヲ諦視シ忽チ色ヲ變テ固ク謝シテ曰ク家人病アリ宿泊ヲ許サスト余等百方辭ヲ設ケテ彼ヲ賺セトモ媼頑トシテ動カス余忽チ一計ヲ案シ所謂家人ノ病トハ何病ナルヤ曰ク腹痛余曰ク我ニ靈藥アリ余等ヲ宿サハ直ニ之ヲ治スヘシト媼戶ヲ閉テ內ニ入リ少クシテ亦出來リテ曰ク乞フ來リ宿セト未タ旅裝ヲ解カス媼藥ヲ促カスコト頻リナリ近藤君與ルニ「モルヒネ」劑一服ヲ以テス食膳ヲ給センヿヲ乞フ媼米糧ナシトテ應セス雞卵ヲ獲ルノ道ナキヤアルヤヲ問フ酒屋三里豆腐屋五里焉クニ行テ之ヲ求メントスルカ乞フ之ヲ思ヘ强辯大ニ勗ム余前ニ家ニ入ルノ時偶マ雞數羽ヲ飼フヲ見ル何スレソ卵ナカラン好矣策ヲ設ケテ之ヲ致サシムルニ若カスト

媼眼ヲ患ウ余私語シテ曰ク我等今飢テ食ヲ獲ス若夫我等ノ爲メ能ク一壺ノ醬一簟ノ食ヲ致スモノアラハ眼疾腹痛立トコロニ之ヲ療スルヲ得ンニト媼沈思スルコト稍々久ウシテ曰ク厨帳或ハ殘飯アランヤモ量リ難シ少ラク之ヲ物色シ來ラン矣燈ヲ點セントスルモ油ナシ近藤君膏藥ヲ熔テ油ニ代フ媼驚キ見テ之ヲ異トス既ニシテ媼食膳ヲ捧ケ來リ謝シテ曰ク吾眼ヲ患ヒ令監等ヲ以テ尋常路傍ノ人ト做ス罪ヲ負フ甚シ家翁前ニ惠ム所ノ藥ヲ服シ腹痛忽チ癒ユ喜ヒ限リナシ乞フ吾カ爲ニ眼藥少許ヲ與ヘヨト余曰ク鷄卵若干ヲ買ヒ來ラハ之ヲ與ヘント彼逡巡亦稍々之ヲ久フシテ曰ク三個ナラハ以テ不時ノ需ニ應セント果シテ余等ノ衝中ニ墜ツ

（九九頁の續き） 諦め切れずに、萬一の天祐を頼みにしてゐた時であつた。しかし故人は既に死を覺悟してゐた。花と共に暮してゐたやうな故人である。花に別れを告げてゐるのだ―と感じて、私は、辛くも涙を耐へだのであつた。

その數刻後、故人はまた苦しみ悶えて、むつくり起き上つた。

「蟲が泣いてる」と故人は云つた。

又しても意外な言葉である。夕方のことで、ひぐらしも鳴くし、籠の中の鈴蟲も鳴くのである。しかし、その時鳴いてゐたのは、何蟲だか、どこにでもよく鳴いてゐる、特に珍重がられもしない、それでゐて、しみじみ秋を想はせるやうな音の蟲であつた。故人はそれを敏く耳に入れたのである。

死を豫知すると、この世のあらゆるものに別れが惜しまれるのだ、殊に詩人である伯父には―と想ふとまたしても涙が滲み出て來るのであつた。

かくして故人は、親しい友なる蟲にも別れを告げた實にそれがこの世に於ける故人の詩人としての最後であつた。それからは、

（百二十六頁へ續く）

# 回顧漫錄

# 回顧漫録

## 通りかゝりの鮮人に百拜

余の初て京城に來られたのは、今（大正四年八月十五日記）より二十五年前、即ち明治二十三年十二月の、シカも三十一日午前七時頃で、今の總督官邸正門の、左側に當る溫突屋で、松本玄榮と云ふ人の、經營に係る京城唯一の旅館で、抑も草鞋の解き始めをしたのである。同行者は岩手縣人佐々木留藏、秋田縣人長井行の兩君で、東京から汽車で横濱へ行き横濱から乘船、神戸、長崎、釜山、仁川を經て、漸く着かれたのである。ナゼ朝着かれたかト。开は其前日仁川（郡回漕店投宿）で、辛ふじて朝鮮馬三頭と馬夫一名とを雇入れることが出來た、長井と僕は馬夫なしの馬に乘り、不馴な手綱を操つて、シイ〳〵駈出した迄はヨカッタが、始與の原野を通る頃、長井と僕は馬から下りて小便をした。トコロが長井の馬は俄に駈出した。ソラ大變だと云ふ間に、僕の馬も飛出した。二匹互にフザケ廻つてナカ〳〵捉らない、追へば逐ふ程遠方へ逃出す、折から通りかゝりの朝鮮人に叩頭百拜して漸く捉えて貰らつた。それで約一時間半許り無駄骨を折つた。漢江の渡しを渉る頃日は全く暮れてしまつた。大急ぎ

で駈出したが、南大門の閉門迄に間に合はなかつた。韓錢をガチャ〳〵さして門番に開門を頼んだがナカ〳〵聞入れない、仕方がないから後戻りして麻浦街道の或る馬宿で一夜を明した。それで朝早々乘り込んだ譯である。渡韓早々朝鮮人と雜魚寢をし、朝鮮沙鉢(サバル)で朝鮮飯を喰つたのは、余等一行が抑も劈頭第一かも知れん、シカシ善い經驗を得た。

附　通商局長河上謹一一行と神戸から仁川迄同船せり。

## 長井と佐々木の睨合

公使館附巡査渡邊鷹治郎君(今は警視)の肝煎にて、今の浦屋旅館の向側なる、中村某の二階を借受け一月四日三人一所に引越したが、二階は六疊と三疊の二間なれど疊がない、差當り仕方がないから、三疊間に新聞や何やを敷き詰め、其上にお互の毛布を襲ね、ドッカリ座るは坐つたが、寔に情ない狀態であつた。間もなく古江又四郎君の好意にて、古疊三枚を借受け岡(兵一)夫人より大火鉢一個貰ひ受けたから、稍々坐敷らしくなつたが、名物の嚴しき寒さは、折々骨を砭すようであつた。トコロが長井と佐々木はどうも折合が悪い。性格は寧ろ似合ふた方だが、互に相下らない。時々無言で睨み合をする。其不平は皆僕へ持て來る。到頭集合生活を罷め、各別居することに話を極め、四月の始め(三月の末か)佐々木と僕は今の日ノ出學校裏に當る、森勝次氏の朝鮮溫突屋を借受け、純然たる自炊生活をしようとしたが、前所有主の故障とかにて、三日目に立退かなければならぬ仕義となり、元の商業會議所(當時總代役場)の左側なる、栗原某(貞一)の溫突一間を借受け、此處で二十四年の越年をしたのである。二十五年の春には今の花月樓の上手なる、田川愛吉の溫突二間を借受け、其處に轉住し、五月事業の打合せカタ〳〵一先づ佐々木を東京へ還へし、(長井は前年秋歸朝)九月(八月?)渡邊君の乞により、留守居カタ〳〵同君の宅へ僑居することゝなり越えて二十六年六月時の辨理公使大石正巳氏の一行に加はり一時歸朝したのである。

## 着京當時の公領事館員

僕が當初着京の際は、公使館員は代理公使近藤眞鋤、林交際官(逸名、此人翌廿五年出雲丸にて支那より歸朝の途次木浦冲にて船體沈沒溺死せり、朝鮮案内の著あり)警部岡兵一、小田切通譯(名ハ萬壽之助、今は正金銀行支配人)新庄書記生(名ハ順貞)巡査渡邊鷹次郎、有馬某、成相某、宮原某の諸氏であつたが、間もなく近藤、林、岡は歸朝を命せられ、其後任として河北俊弼(代理公使)、松井慶四郎(交際官…今の外務次官)來任せるが、河北公使は着任早々病氣に罹り、三箇月許りにて遂に館内で客死するに

至つた、其後任には梶山鼎介それから大石正己の順で、大石は辨理公使として來任したのである。

領事館員は小川書記生（鳩山和夫の兄名は盛重）領事代理として在任、其次は宮本羆（書記生）領事代理として來任、それから專任領事兼公使館書記官として松村濬に着任されたのである。

公使館附武官は陸軍大尉渡邊鐵太郎、海軍大尉武富邦鼎の二氏であつた。

外國側では清國は公使袁世凱、領事は唐紹儀であつたが、其他の列國は一々名前を記憶しない。

## 林權助の痛罵哄笑

仁川に上陸したのは確か十二月の廿八日か九日であつたロー。領事は林權助だと言ふことを聞き、林は町田忠治の同窓だから一とつ訪問して見ようと、其晩長井と僕は領事館に出掛けた。早速應接室で引見されたが、當時林氏は尙ほ無妻の獨身者にて、其氣焰當るべからずであつた。町田と同窓だけで、町田などが主筆などゝ上がめらるゝ樣な內地の大新聞は、テンから見る氣にならぬ（當時町田は朝野新聞に執筆せり、予は同新聞の通信を囑托せられたればなり）などゝ、全く官吏風の橫柄でなく、動もすれば議論仕掛けに、一々痛罵哄笑を加え、其風采の粗扑なる、其の態度の洒落たるには稍々驚いたと同時に、心中竊に敬服した所であつた。それから京城に來て近藤公使に面會したが、是は亦た人善しの好老爺であつた。小川領事代理に至つては殆んど鼻摘まみで折々令弟和天を引合に出すのは全く俗史の好標本であつた、河北公使に會見の機會はなかつたが、梶山公使は是亦不得要領の金溜老爺にて、何等の特長をも見出すことは出來なかつた。大石正巳は何しろ在野の空論政治家から一躍辨理公使になつたタケで其言ふ所其行ふ所總て人意の表に出で、樽俎折衝頗る痛快であつた。永らく退嬰萎微振はざる外交舞臺に、一點の光明を與へたるのみならず、我居留民間に一縷の活氣を添へたるもの實に大石公使のお蔭である。

## 京城の三幅對

京城の民間側には、當時三幅對と謂ふ熟語があつて、此三幅對は所謂居留民間の有力家で、そうして居留地機關各般の世話役であるそうな。此三幅對は山口縣の人市川石動、大分縣人の和田常一、鹿兒島縣人の山口太兵衛の三人者である、薩長の勢力は這邊迄にも布植されつゝあるかと一寸驚かされた。京城の事情を研究するには、此三人者を訪問するは、尤も捷徑だろうと議一決し、高知縣人三谷克二の案內にて、先づ

市川氏、其次に和田氏、和田氏同行にて山口氏を訪問した、孰れも快く引見、未だ初對面の挨拶も訖らざるに早や酒は出る、肉を炙く、大胡座をかく、談論風發、繼ぐに放歌高吟を以てす。僕等も母國に在りては、隨分粗野木強の譏りを受け、無遠慮の點に於ては、聊か人後に墜ちざる積りなりしも、此三人者には全く一籌を輸したのである、シカモ一見舊知の如く、胸間少しも城壁を設けざるは、余等に取りては是程嬉しき好感を與へたるはなかつた。今其無遠慮にして天眞爛熳たる一例を語らんか。前述の如く余と佐々木は、三谷君に伴はれ、夕方七時頃(一月)始めて和田君を泥幌の住居に訪問した。和田君は恰も晩酌中であつたが、どうぞお上り下さい、丁度晩酌中だから、先づ一献と盞を指し出す。僅に二三語を交へたる頃、突然貴公等は金玉均の密使だそうですネ。余等は此意外の質問に吃驚した。無禮なことを言ふ人だと思ふた、で誰からそんな無稽のことをお聞きになりましたか。誰からも聞きません新聞に出でゐました。これには僕等も二度吃驚した。何新聞に。東雲新聞に。見せて下さい、ソーラご覽なさいと茶棚の上から取て新聞を差出す、果して載てゐる。金玉均の密使?と見出しをして僕等の名前を書き聯ね、客臘末神戸から潛行した。費用は青木外務大臣が出したそうな、と附加へてある。寔に尤もらしく書てある。これにはマタ三度吃驚した、佐々木は揣摩臆測も亦甚しい、早速正誤を申込ふと、痛く憤慨したが、和田君は國家の爲なら大に遣るべしだ、但し政府のお眯方ならご免を蒙ると言ひ放つて、別に不快な顏をもしない。それから少焉盞の取り遣りをやつたが、何か言葉の行違ひより三谷君と口爭ひをしたかと思ふと、忽ち組打となり、三谷君は椽側から墜され失敬々々と穩に歸り掛けた。そこで余等も失敬せんと坐を立ちかけたが、君は強て余等を引留め笑ふて曰く、三谷と云ふ奴は善い加減なことを言ふて歩く厭な奴だから追拂つたのだ、君等も餘り親密にせん方はよかろう、サアーこれから緩くり飲ふと、其磊落恬淡實に斯の若くであつた。爾來春秋二十餘年、世に變遷あり時に隆替ありと雖も、余と三人者の交情は其始めの如く今に至つて互に相渝らざるは、全く當時初對面の直覺感より胚胎せるものと思はるゝのである。

## 袁世凱の立退請求

明治廿四年四五月の頃、余と長井行と相携ゐて、支那公使館(清國統理公署か)に公使袁世凱を訪問した。公使は病氣中だとて、某書記官(逸名)と面會し、余等朝鮮觀光の客、偶ま袁大人の雷名を聞き、玆に敬意を表する旨を陳べ、暫時筆談の後、支那茶の馳走を受けて歸宅した迄は善かつたが、二三日過きて袁世凱は我公使館を訪問の折、公使に向ひ素性の知れぬ二青年は、過日余に面會を求めたりとて、余等の名刺

を差出し官吏にもあらず、商民にもあらず、而ふして文章又自在、是れ尋常一様の觀光客とも思はれず、或は怕る言を觀光に假り、暗に政變を企るの人々なるやも圖られず、宜しく速に退京させられたしと申込まれたそうである、こんな事のあろうとは夢にも思はなかつたので、或る日長井は大院君を單獨訪問して詩文の筆談を試みた、處が其翌日外務督辨を經由し、右筆談書類を添えて、我公使館に袁世凱同様の立退請求を申込んで來たそうだ。馬鹿〳〵しいが大變な事件になつた、僕は小川領事代理の召喚を受け、渡韓の目的を訊問された、そうして退韓條例を以て威喝された。尋て又松井交際官より小川同様の訊問を受けたが、流石交際官タケで退韓條例を云々しなかつたが穩かに貴公等は目下支那人朝鮮人より注意人物として目せられ居れば朝鮮顯官又は外國使館等へ一切出入を止められたし、殊に無智の暴民等は、萬一危害を加へぬとも限らざれは、市中の散歩も餘り遠方へ行かぬ様なされたしと諭されたり。以て當時我官邊の腑甲斐なく、徒らに事勿れ主義を恪守し、無垢の居留民を嚇すに動もすれば退韓條例を擬するなど心得違ひも亦甚矣哉であつた。

## 退韓條例の精神

仁川領事の林權助は、當時兎も角毛色の異つた人物であつた。或る日京城に來られたから、面會して前項の顚末を語り、退韓條例の解釋を求めたるが、林君は無造作にソンナ性質の法律ぢやない。京城はウルサイなら仁川に來玉へ。僕も小川に善く話して置くから。それから程經て杉村濬は、京城領事として着任されたれば、前同様屢々退韓命令云々を以て威喝されたる次第を申述べ、貴下の適用範圍如何と念を押した。トコロが杉村君はあの條例は英國が香港に施行したる退去條例に準し制定したるものにて、其制定者の一人は實は自分である。法の精神は、モト〳〵淫賣婦の取締に出でたるものにて、所謂風俗壞亂者の爲に作られたのである。されども序でに治安妨害の四字をも附加え置きたれば、執法者の了見次第にては、政治上の關係者にも適用されぬでもない。然し立法當時の精神は極めて少範圍であつた。僕の在職中は先づ濫用せぬ考であると言はれた。これでイクラか不安の念が薄らいだが、既に刑法と言ふ立派な法律のあるにも拘らず、不穩の形跡も意思もない者に向つて、自分のご都合上此の兇器を振り廻はして、我々居留民を威壓したるは寔に苦々しき次第であつた。

## 花札に負けた爲めの退韓處分

退韓令で思ひ出したが、僕が入京以來同令に據り京城拂ひを命ぜられたるイの一番は、岸本某(逸名)であつた。時は二十五年の春先きで、宮本羅の領事代理時代であつ

た、岸本某は播州姫路生れで、大鳥圭介の書生であつたと自稱してゐたが、何の爲に來韓したか、一向其目的を話さなかつたが、折々公使館又は領事館内に出入して、館員等と睦ましくして居たようであつたが、突然將來始安に妨害あるものと認め、三ケ年間退韓を命ずと申渡された。本人も驚いたろうが、曩に屢々この威喝を受けたる僕等も中心窃に不安の念を萠したのである。そこで岸本は再三其理由を質問せしも、說明の限りにあらずと刎付けられる。期日迄に退京せんにも、旅費がないから出立されぬ。そんなら一時立換よう。生れてこの方下等で旅行をした覺るがないと駄々を捏る。仕方がないから館員等より若干づゝの餞別金を募集してやつとの事命令の威嚴を保つたそうな。が何故退韓さるゝに至つたかは一の疑問であつた。筈棒な話だが、或人はこう語つてゐた。岸本の公領事館に頻々出入せしは、館員等と花札を引く爲めであつて、始めは五分間の勝負で、慰み半分で濟んだが、追々岸本は奥の手を出し、無遠慮に一座の金錢を捲き上げ、剩へ横柄な顏付をするより、相手方の面々は江戸の敵を長崎で討つ筆法で、此始末に及んだそうな。賭博は一人で出來ぬ。岸本の罪すべきなれば、其對手者をも處分すべきである。如何に融通の利ける條例なればとて并は餘りに勝手な濫用と言はねばなるまい。



## 居留地の反目的暗流

明治二十四年七月は、恰も居留民總代の改選期に相當したが、端なくも友人間に意外の軋轢を生ぜしめ、タトへ一時たりとも此居留地に二派の反目的暗流を漲らしたのは、實に僕と佐々木の罪であつた。并は前に述べたる三幅對の一人なる山口君は總代であつて別に惡聲しなかつたが、當時亦其一人なる市川君は、無職業にてブラ〳〵遊んで居つた。家政も餘り豐かでなかつた、そこで僕等は一片の同情心と且はスペンサーの代議政體論やルーソーの民約論を嚙り付けた、所謂政治的見地より此際居留地の主腦者を代へ、機關を改め其根抵を固め、以て大に官邊に對抗し、民心を新にして盛に居留民の勢力擴張を圖らんと、全く理想的抱負から密かに市川君推薦を二三の人々に謀りたるに在外案ずるより產むが易く、贊成者續々出來たれば、宜しく枚を銜むで山口派の油斷に乘ず可しとなし、狐鼠〳〵有權者を說き付けつゝあつたが、此猫額大の居留地で、何條知られぬ筈がある。サー大變山口派は猛然として競爭を開始した。勿論僕等の秘密的作戰は、全く山口派の意地を煽り立てたのである。最早公然の秘密ドコロの騒ぎぢやない。旗鼓堂々相爭ふ大舞臺となつた。山口派は本陣を荻園料亭に構へ、和田君總指揮の下に、運動員は四方に驅け付る。此方は市川邸を事務所に宛て

旗島勝與采配の下に勸誘者は飛び廻はる、投票前夜の如き双方共殆んと一睡をもなさゞる有樣にて、サテ開函當日一旦投票したる投票の取消マタ其取消、又々其取消の届出等、其滑稽さは以て如何に競爭の激烈なりしかを證據立てゝ書きである。したが市川派はタッタ一票の差で負になつた、悔しくてたまらない。そこで何か文句をつけて撰擧無効にせしめようと考へた。當時は諸規則も至て不完全にて、撰擧規則もなければ勿論有權者名簿も不確定であつた。女子にも撰被撰擧權もあれば、投票用紙の配布を受けざる有權者も出て來た。一方には異議の申立をなさしむると同時に僕は宮本領事代理を訪ふて撰擧の不神聖を縷述した。宮本氏は首を搔て腕を組んだ。實際各居留地を通じて是迄總代の競爭とか議員の競爭とか、こんな騷ぎは殆んと無かつたので、隨て在來の慣例と不備の規則で何等の苦情も難題も無かつたが、サテこう激烈な、競爭をするようであつては、確とした法律規則に準據せしめねばならない。宮本氏も竟に意を決して今回の撰擧を無効にした、そして新に撰擧規則を制定し、撰擧人心得を公布して同月下旬再撰擧を行はしめた。そこで市川派は前回の失敗に鑑み尤も熱心に運動を開始した。が山口派は少々大人氣ないとでも思ふたか、表面頗る冷靜であつたから市川君は大多數で當撰した。そこで又代議機關の居留民會議員をも吾黨より撰擧せねば、所謂佛作りて魂を入れぬようなものだと佐々木の發議に依り、マタぞろ議員撰擧の準備に取懸つたが、悲矣哉市川派の應援者は大抵年少氣鋭の輩にて無職業の者が多かつた。まゝよ、名義ダケの資格を作れと云ふので、新聞通信員の代書業、朝鮮通辨の仲買業など頗る珍妙な一夜造りの候補者は出來たのである。こんな風であるから、世間も只呆れて眞面目に候補を爭ふ勇氣も出なかつたと見え、議員撰擧も豫定通り無難に多數を制するに至つた。が謂はゞ毒を以て毒を洗ふようなもので格別著しき刷新をも効績をも現はすに至らなかつたが、兎も角居留民間に一條の活氣を添る官邊をして稍々警戒の念を起さしめたるは事實である。可笑しなことには當時政海の流行語なる民黨吏黨などの名義を借用して嬉しがる者さへあつたのは、稚氣マタ愛すべしであつた、但し吏黨も民黨もなかつたが、偶然の行懸りより飛んだ波瀾を平地に越し、知らず〳〵相互の感情を疎隔ならしめたるは全く申譯のなき次第であつた。この競爭のあつてから、妙なことには仁川でも競爭があつた。釜山でも頗る激烈であつた。元山でもあつたように記臆する。自然自治思想の芽の出る時季であつたかも知らぬ。

## 家主爺さんの奇拔

僕の同居せる家主の栗原某は、ナカ〳〵奇拔なことを考へ出す老爺であつた。其頃鳥類の多かつたことは實に想像以外であつた。夕方になると、空一面は黑胡麻を撒き

たらん如く、折々俄に大風の吹き來る音がするので、出て見ると雁鴨の群れが翔け行く音である。高空飛行やら低空飛行やらで、お伽噺の目潰灰を拋けてさへ捕れそうであつた。トコロガが誰方も銃砲を所持せしものはなかつた。税關でナカ〳〵八釜敷い護身用のピストルとか日本刀とかは一々領事の證明を得なければならない。獵銃の携帶は勿論許されなかつた。タマ〳〵一二挺密藏するものありとすると、彈藥を供給する所がない。天空任鳥飛で好獵家は皆指を咥へて地團太踏むでのである。ソコで爺さん一網打盡の策を案出した。第一策は先づ漢江に流し針をやつて、一繩能く數十羽の雁鴨を鈎り上る計畫であつた。二三日やつて見たが一羽もかゝらない。ソコで第二策は蘆中に括り糸を敷き散らして萬一を僥倖しようとした。マタ二三晩やつて見たが鳥の方は不正直だ。十二月の嚴寒最中にこんな離れ藝をするのだから、贏ち得たるものは、風邪とホンに咳の山だ。シカシ鵲たけ二三羽捕つて來たことがあるが、ドンナ奇計を用ひたか聞かなかつた。ソコで爺さん、文王流に大悟徹底したかどうだか、他の方面に開眼一警した。翁はどこからか一疋の猿を買ふて來た。朝から晩まで、大根と人蔘と折檻との三道具を以て藝當を仕込んだのである。熱心と辛抱は妙なもので、東西〳〵三番叟、下れば下り藤などの藝をやるやうになつた。これからが問題である。そこで爺さん猿の見世物興行を警察に出願に及んだ。是迄興行物などの出願者はなかつたが爲め一も二もなく却下された。兎角興行見世物等は日韓人間に種々爭端を釀し出すことがマタ一面の理由であつたらしい。爺さん、落膽して僕に相談を持ちかけた。僕思ふに、今迄許さなかつたから許さないとは不許可の理由とならない。早晩許さるべきものである。但し興行物の性質如何によりて認不認可は警察の權能である。日韓人間に種々の爭端を釀す虞れあらば豫め之に備へると同時に、若し事起らば其理非曲直に據て之を處分するは、警察本來の職務である。徒らに事勿れ主義を株守して人民の便利を圖らざるは、畢竟偷安姑息の致す所である。僕はこう思ふたから可しと早速領事代理を訪問して意見を交換した。が格別六ッヶ敷議論なく許可は許可になつたが、僕は間接の責任者格になつたのである。興行場所は今の本願寺下巴城館の上邊りと記臆せらるゝも、不確かだが、抑もこの爺さんの手飼猿は京城に於る興行物の元祖である。時は明治二十四年夏の半ば頃であつたらう乎。

## 佐々木留藏の惡戲

同行の佐々木留藏は一種の惡戲者であつた。その節、公使館附駐在武官の渡邊陸軍大尉武富海軍大尉の兩人共、内々下女兼帶の妾婦(元仲居)を蓄へて居つたが、武富大尉は磊落洒脱の劇飲家とて、折々居留民と接觸し、暴飲放談、世間の風評などには、至

て無頓着なる人なりしも、渡邊大尉は餘り酒のイケぬ勢でもあらうが、極めて謹嚴を粧ひ、隨つて世間の附合も成るべく避けられるタケ、避けようと云ふ風であつた。或る夜、佐々木は巡査交番所に立寄りしに、折柄百田雜貨店の番頭某はお得意の通帳を携ゑ居りしを、佐々木は何氣なく、話の合間〳〵に開き行きしに、會々渡邊大尉の通帳に出會したるこそ一大問題なれ。通帳の中には白粉やら髪附やら洗粉やら婦人用の品々澤山あるを見て、一番揶揄つてやろうと、咄嗟の好奇心から「軍人の通帳」と題し平素謹嚴方正高く自ら操持する渡邊大尉の通帳に、半ば婦人化粧用の品物のみ注文しつゝあるは、寔に奇怪千萬の至りである。在外軍人の外衒内敗眞に慨嘆に價すと云ふ意味の通信を朝野新聞に送つたのである。朝野新聞は斯る通信を載せるは、稍々大人氣ないと思ふたか、轉じて「やまと新聞」の三面記事に載せられた。當時公使館では朝鮮切拔通信を取つて居つたから直に知れ渉つた。渡邊大尉は非常に吃驚し、一方ならず心配せられ其夜密かに其女を仁川へ避けさせた。氣の毒な話である。同大尉に僕は二三度面會して居る。一夕晩餐を共にしようと云ふ案内が來た、行つて見ると、ご馳走の裏には勿論執筆者の詮議立であつた。少くとも疑は僕等に掛つて居つたが、僕等の關係ある新聞は朝野と郵便報知である。まして況んや些々たる他人の内行を發くような卑劣漢ではない。殊に貴下の通帳を見るような機會は僕等にどうしてあらう



かと、程善く辨解をしてご馳走得をしたことがある。後で聞けは山口太兵衛君に疑がかゝつたこと云ふことであるが渡邊大尉は小心翼々正直者であつた。

## 朝鮮で英語の筆談

僕の渡韓した頃、京城で米國人が「コレアン、レビュ」か「レポート」(確かならず)と云ふ英文雜誌を毎月一回發刊しつゝあると云ふことを聞いた。外國人の朝鮮觀を研究するのは持つて來いと思ふたが、其發行所も販賣所も分らなかつた。或る雪の降る日(明治廿四年の末頃か廿五年の一二月頃なるべし)南大門通りを彷徨ふて、偶然米人の設立に係る濟世醫院(名稱不確)の前に出た。フト思ひ出した儘、無遠慮に門内に這入て、案内を乞ふた。トコロが早速室内に請せられて用向を伺はれたが、悲しい事には僕は口の英語は出來ない。勿論朝鮮語は出來ない。ソコで手帖と鉛筆を出して英語の筆談を試みた。斷つて置くが僕等は學校で英文を讀むことを學んだが英語を饒舌ることを稽古しなかつた。相手の先生は妙な顔をしてツク〳〵僕を視た。そして自分もペンとペーパーを出して返答された。肝腎の用向より筆と口との出來不出來の話題を先頭として種々の談話は紙上に於て交換された。先生は頗る興がつて、それから態々發行所に僕を案内しようと云ふて外套を纏ひ長靴を穿つて門を出た。雪路を踏んで左往

右折、坂を上り煙地を過き、彼是三四町も歩行いたと思ふ頃、平家建の可なり大きな洋館に辿り着いた。應接間に入り、ストーブにて暫らく暖を取つて居ると、驚く勿れ年頃の老夫婦と十七八の窈窕なる娘さん一人とがドアを排して入つて來た。そして一々叮嚀に僕に紹介せられ、それから珈琲やら菓子やら卓上に運び來つて、僕を厚遇した。サテ亦例の筆談が始まつたので、笑ふやら感嘆やら一坐少焉さんざめかつた。彼是一時間許りして本月前月刊行の雜誌二冊を買求め(定價六十錢なりと記臆す)外に印刷物三四種を貰ひ受け例の病院先生に伴はれ、厚く握手の禮を返し再會を約して歸路に對いたが、全く意料の外で、宛も夢路を辿るような心地がした。外國人の親切さ加減が總てこんな風であつたら大抵の韓人共は知らず〳〵心服するは當然であらうと、今更ながら驚いたのである。今から考へると、どの邊であつたか、不確かなれど朝鮮銀行の裏手か、それども德壽宮の裏手であつたろうか、朝鮮で英語の筆談をした者は恐くは古今僕一人だらう。



## 洋妾の掛合は眞平御免

英語で思出したが、明治廿五年の夏の頃、或る日僕は鑄洞の僑居に晝寢をして居つた。窓外を右に往き左に行き、用事ありげにウロ〳〵する四十前後の丸髷婆さんがあつた。何か用事ですかと尋ねたら、實は折入つたお願ひで伺ひましたと言ふ。そんならお這り下さいと、座に引いて其お願ひの筋を聞て見たら、ナンダ次の樣なお話である。私に一人の娘の子がありますが、月々相當の手當を寄越す約束で、昨年英國人に洋妾にやりましたが、今は香港に居られます。始めの内は毎月その手當を當地の領事館を經て約束通り下されましたが、この三四月一向送つて寄越しません。領事館に聞て見ても此頃手紙も何も參らんと申します。それで私は大變難儀して居ますから、どうぞ娘の亭主に嚴重な懸合狀を書いて下さいとの一件だ。底事ぞ僕を代書人と心得違ひしたかと、中心竊かに憤慨したが、一體どうしてソンナ事を僕の處へ持つて來ましたかと、反問したら、婆さんの言ふことはナカ〳〵面白いではないか。承れば貴方樣は在留日本人を助ける爲めに當地にお出でなそうでありませんか、相手は公使だろうが、領事だろうが、朝鮮人は無論、乃至外國人だろうが、カリソメにも在留日本人の不利益なる事柄あれば、思ひ切つてお力添して下さると云ふことを聞きましたから云々。これには僕も覺えず噴飯を禁じ得なかつたのである。さりながらイクラなんでも洋妾のお掛合は眞平御免だ。そこで婆さんを諭して言ふには、僕は英文も書けんし、ヨシ亦書けるとしても、香港と京城は數千里隔り居れば、タトヘ手紙を出して遣つても、返事が來なければ夫迄だ。一層英國領事館へ行つて、斯く〳〵の次第で非常に困

難して居る旨を申述べ、一應ご照會方をお頼みする方が得策だと。トコロが婆さん遂さず、そんなら御一所に行つて下さいと。この婆ナカ〳〵只の鼠にあらずと、稍々ムットとしたが、今度は鋒先を代へて言ふ。全體日本の女を毛唐奴の嵐弄物にするは、以ての外の心得違ひなるのみならず、惹いては國家の耻辱である。僕等は當地へ來てかゝる心得違ひの者三四人あることを聞て、實は大に憤慨して居るのである。が今更遣つてしまつたのは、仕方がないとして、アマリ世間に噂さ立てられぬよう心掛けが肝腎である。元洋館に奉公して英語を話せる女の人に、こう云ふ人があるから、其女の人に折入つて事情を打ち明け、同道して貰つたらよからうと、ヤツトの事でやうやう彈正退治をやつた譯である。これも畢竟僕が外國人の宅に出入したから充分英語を繰るものと間違へられた祟りである。因にこの婆さん、僕が再度の渡韓、即ち彼是七八年後に、偶然邂逅し、前年のお禮カタ〳〵上海土産として茶盆一個を贈られたのはマタ奇特である。

（百四頁の續き）花を賞し蟲を愛でる餘裕杯は全く奪はれて了つた。病苦に責められ苛まれつゞけ、翌朝遂に彼の世の花園に旅立つて逝つたのである。その朝も幾つかの朝顔が、けなげに咲いてゐた。その花の色彩の鮮さを何故か私は未だに私の網膜に感ずることができる。（了）

# 附　錄

# マンムル・フエサ小史

故人後半生の事業中、最も記念されなければならないのは、商品陳列所の經營であらう。否おそらくその時代は故人の一生を通じての黄金時代と云つてもよいであらう。しかし、その事業は、今では俤を偲ぶ所縁もないのだ。そして忘れられ、或は全く知られない儘に埋れて行かうとしてゐる。

残念である。故人既に逝き、その一週忌に際しこの遺稿を編むに當つて、更にこの憾みが深い。敢て悪文を錄する所以である。

この稿は伯母の想ひ出話を基にして綴つた。卷頭の寫眞を參照され度い。

（渡部一郎誌）

故人が初めて京城に商品陳列所を開いたのは、實に明治三十一年十一月三日、天長佳節の當日であつた。故人小傳に見えてゐる通り、一は未開無知の鮮人に日本の百貨を紹介して彼等の知識文化の程度を向上せしむる爲、一は日本商人の中に、往々鮮人の無知盲昧に乘じて法外な暴利を貪る者があるのを慨いてであつた。

この企てを當時の領事秋月左都夫氏に齎すと、氏は大いにその企てに賛同し、資金を補助し居留地の商店に出品方を斡旋する等、種々その實現に盡力され、また中村再造氏は、今の旭町一丁目と本町一丁目の角

に空いてゐた鮮人家屋を無償で提供されたのであつた。

今でこそ、前に電車が走り、朝鮮銀行、京城郵便局等の高壯な建物の蟠居する、京城目抜きの場所であるが、當時は樹木鬱蒼、草蓬々、その間に鮮人家屋が疎らた散在するに過ぎず、屢々縊死者が發見されるといふやうな、晝でもうそ淋しい所であつた。それが後日京城目抜きの場所になるに至つたのには、故人の陳列所が遂く因を成したと云つても過言ではあるまい。

愈々開業されると、品が確實で値が廉く親切だといふので、忽ち市民の評判になつた。殊にそれが鮮人に歡ばれ『マンムル、プエサ』の名が一時に喧傳されるやうになつた。『マンムル、プエサ』といふのは、朝鮮語で『萬物商會』即ち百貨店の謂である。實に陳列所は、小さいながらも、京城唯一の百貨店であつたのだ。かくて客足は日益しに繁く、爲に食事の時間を失つて了ふ事も珍らしくはなかつた。

偶々後に嘗て外務次官となつた倉知氏が視察に來られ「方々の商品陳列所を視て廻つて、こんなに成績の良いところはない」と激賞され、農商務省から年額五百圓の補助金支出方を取計つて下された。

それ迄は、居留地の大商店から出品を乞ふた商品を、謂はゞ委託販賣してゐたのであつたが、それからは農商務省の補助金を資金として、和田常市氏の斡旋により直接商品を大阪から仕入れる方針を併せ執ることにした。

珍らし物好きの鮮人は、荷が着くのを見ると、その周圍にたかつて離れず蓋の空くのを待つて、どん〳〵買つて行くといふ風であつたから、荷の着くのは、金が入つて來たも同然であつた。羽が生えて飛ぶやうに賣れるとは正に當時の景況であつた。

この景況に鑑み、どし〳〵商品が仕入れられた。伯母の指輪衣類等も往々その資金に換へられた。かくて店はただ繁昌する一方で、それ故また商品は逐次豐富となり、在來の店では狹隘を告げ來た。

明治三十六年、大阪に第五回内國勸業大博覽會が開かれた年である。恰も一時金壹千圓を以つて農商務省の補助は打切りになつた。そこで故人は、その壹千圓と賣上金若干を携へ、或は陳列所を擴張するに適當した建物もがな、と大阪の博覽會に出かけて行つたのである。

愛知縣の賣店の一部として建てられてあつた名古屋城に擬した建物を見た時、壯豪な故人の性格の一面は忽ち京城の一劃に天空を摩して聳え立つ名古屋城を頭に描いて自らの胸を躍らした。といふのは、當時恰も露西亞の勢力が次第に朝鮮に浸滲して來た折柄で、由來事大的な朝鮮の人心は稍もすると、露西亞に傾き、日本を輕侮する傾があつた。「よし、日本人といふものが、どんなに偉きな仕事をするものだか見て居れ」即ち名古屋城建立によつて鮮人を心服せしめてやらうと思つたのだ。陳列所の經營既に、儲ける一方の事業ではなかつた。今、また不隱の風雲に鑑み、政治的見地から敢てこの事を思ひ立つたのである。即ち第一銀行に澁澤氏を訪ひ、兼々信任を得てゐる官途の諸名士を保證人として、金五千圓の借入方を申込むだ。ところが氏は「保證に立つ諸高官方よりも、むしろ貴君を信ずる」とて直ぐに申込金額を用立てゝ下された。直ちに模擬名古屋城購入の手續が出來た。

解體された材料は和船三雙に積載されて大阪から仁川に、仁川かから更に貨車で京城に運ばれた。しかし、さて愈々組立にかゝる段になると荷造りが不完全であつた爲、また船が和船であつた爲、途中材料の三分の一は流失されてゐた。のみならず、その建築を引き請けた棟領は遣造り、運搬の費用を前取りしたまゝ臺灣に渡り、その代りとして森某なる大工を寄越したが、森某なるものは更に組立てを心得ない。萬事に緻密で器用な故人は棟領に代つて、組合せを指圖し、不足の材料を購ひ足し、苦心慘憺の結果、十月

末とにかく組立てを了つたのである。

上棟式は天長の佳節にあやかつて、十一月三日に擧げられた。當時京城第一の高樓たる四階の櫓の上から祝ひの餅を撒いた時の故人の心境が想ひやられるではないか。事餘談に亘るが、最初陳列所を開いたのもこの佳節をトしてであつた。儒學を究め、君臣の義に厚い故人の面目の一端を語るものと云つてよからう。

さて工事落成迄には幾多の辛苦艱難があつた。恰も季節は、酒が凍るといふ酷寒に向つてゐた。しかし五月二十五日は故人嚴父の命日に當るので、翌る年の其の日迄に如何にしても落成開業の運びにしたいと森大工その他を督勵し、火を焚いて空氣を暖めながら壁を塗らせたりした。材料の不揃ひ、工事の煩雜に森大工は屢々泣いた。故人は痩せ細つた。が幸なことには、春になると、日露戰役勃發の際、戰地に働きに出かけて行つた大工等が仕事が無くなつて夥多京城に流れ込んで事た。それ等は安い給料で喜んで工事に就いたので、ずん〳〵捗り、一對の四層樓と平家建の賣店と二階建の住宅と併せて百六十坪の建物が五月中旬首尾よく俊工した。工資一萬餘圓。心身過勞の爲故人夫妻は骨と皮に迄憔悴した。

しかし古松蒼鬱たる南山を背景に、金鯱白壁の四層樓が、鮮人の陋屋を眼下に嶄然天空に聳え立つた光景は蓋し京城に於ける前代未聞の偉觀壯觀であつた。故人の得意、滿足想ひみるべしである。

落成開業の式は豫走通り五月二十五日に擧げられた。四層樓の庇から庇に張り交はされた萬國々旗、提灯の色彩は初夏の爽風に翻へり搖ひ、樓上で打ち鳴らす大太鼓の音は五月の青空に鳴り渡つた。庭では爆竹が絶えず景氣を上げた。

在留、朝野の名士が招待された。(公使代理は名古屋城建築の壯擧を讃へ、鮮人開發商紀肅正の模範機關なる、而して京校唯一の百貨店なる陳列所の未來に彌上に幸あらん事を祈る意味の祝辭を朗讀された。

應て、賣店から城閣に通ずる步廊に、鮨、おでん、しるこ、ビアホール等の模擬店が開かれた。朝野名士の祝辭と紅裙の愛嬌が交々さんざめき渡つた。

この盛大な落成開業式の情景を眼前にし、こゝに至る八ケ月の辛慘を憶ひ、夢か現實か、且つ疑ひ且つ欣びながら、さて紀念撮影のカメラの前に立つた時の故人夫妻の感慨察するに餘りあるではないか。

名古屋城は果して鮮人を(勿論日本人其他の外國人も、だが特に鮮人)驚かした。京城全市の展望を擅にすることが出來る三階四階に登つて、彼等は切りに哀號の嘆聲を放つた。南山と何れが高いか抔質問する者もあつた。そしてこんな大さなものを立てた『マンムル、フエサ』の主人は、一體何人であるか、と驚嘆畏敬の眼を向けるのであつた。

間口十五間、奥行三間の賣店、及び城閣の一階、二階には、ありとあらゆる百貨が整然と陳列された。恰然「三越」である。新築の『マンムル、フエサ』が以前にも幾倍して評判を贏た事は云ふ迄もない。雪崩の如く寄せて來る客の數は、日々實に三百人に上つた。

しかし日露戰役の結果韓國を日本が統監する事となり韓國貨幣が廢された結果顧客の大部分を鮮人に持つ陳列所への客足は次第に疎くなつたのみならず、戰後續々入り込むで來た純日本商人の商略には素々商人ではない故人の到底敵すべくもなく見えて來た。と云つて陳列所を閉鎖して了ふには、未だあまりに忍特と愛執があり過ぎた。しかし和田氏の度々の勸告に動かされ、明治四十年春遂に陳列所の地所建物全部を日本メソヂスト教會に讓渡した事は小傳に掲げられてある所の如くである。

名古屋城は實に故人に取つては、故人の事業の象徵であり、『マンムル、フエサ』は實に故人の愛兒であつたのだ。それに對する忍特と愛執の絆絶ち難く、その半ばを借り受け、爾後二ケ年、今の東洋拓殖會社の

場所に居を移す迄階下を賣店として賣殘り品を整理し、二階三階四階を住居としてゐたのはまた無理からぬ仕儀であつた。

後大正五年、實に建立されてから十三年の間南出の麓に高く聳えてゐた名古屋城は、競賣に附せられ落札者に依つて取り壞されることになつた。

故人の愛兒「マンタル、フエサ」の名既に忘れられ、今故人半生の事業の象徴であるところの名古屋城また永久にその佛を失はんとするの嘆を濡れ綿いた時の故人の深き感慨―それは、載げて三十八頁に掲ぐる所の故人の詩に悉されてゐる。乞ふ、就いて三讀せられよ。（了）



# 初齋遺稿 終

早くも亡夫の一週忌を迎へる日となりました。この日に際し、亡夫在世の日を記念する爲、また生前の先輩知友の皆様の厚き御恩顧に感謝の微衷を表はす爲に遺稿を蒐集編纂して、御頒ち申上る事に致しました。何卒暇々に御繙讀下さる様御願申上ます。

終に臨み、題字を下さいました尾崎先生、小傳をお書き下され、また種々編纂上御盡力下さいました三浦様に厚く御禮申上ます。

大正十四年八月一日

海浦よし

544
12

544
12

終